

論 説

飛騨国高山の人口推移

佐々木 陽一郎

はじめに

本論文はさきに千葉大学経済学会・総合政策学会編『千葉大学経済研究』第16巻第3号で発表した拙著「飛騨国高山の宗門人別帳」の続編である。前稿では高山の宗門人別帳の特質、さらにそこから得られた若干の結果を報告した。本稿ではそれに基づいて高山の主要な人口指標の時系列的分析をおこなう¹⁾。すなわち石高、人口の推移、世帯数の変化、高山以外の他町との比較、性比の推移、年齢別人口構造の推移を取り上げ、その時系列分析をおこない、もって江戸時代後半の小規模都市の実態を明らかにしようとするものである¹⁾。高山は江戸時代に人口が増加した数少ない都市である²⁾。飛騨国は江戸時代に人口が増加した国であ

-
- 1) 現在に至るまで宗門人別帳のようなマイクロデータを利用した江戸時代の都市人口研究は少ない。その理由として浜野潔はその原因を都市の宗門人別帳の残存率の少なさ、かりに史料が得られたとしてもその分量の多さによる処理の困難さ、とくに幕府直轄領では宗門人別帳によくみられる年齢記載の欠如の三点に求めている。研究代表者国際日本文化研究センター名誉教授速水融編文部省科学研究創成的基礎研究『ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究』最終実績報告書、2000、浜野潔1.8「都市人口」
 - 2) 陸奥国安積郡郡山上町などは数少ない人口が増加した都市の好例である。高橋美由紀『郡山上町の都市化—人口増加はなぜ生じたか—』、社会経済史学会第65回全国大会(1997年、5月31日、東北大学)、および日本人口学会東北部会(1997年11月1日報告)。

り、高山も同様に人口が増加した。高山の性比は限りなく1に近く、この点で江戸、大阪および京都のような大都市とはかなり異なる人口構成をもっている。したがって出生率もそれなりに高い。しかし都市であるがゆえに死亡数も多く、自然増加率は僅かに1を下回る。したがって人口増加分は結果的に市外からの純流入人口による。この純流入は二つの効果をもつ。すなわち流入人口はそれだけでも人口増加に寄与するが、移入人口の特性として彼らあるいは彼女達が若い世代に属するゆえに、出生率を引き上げ、死亡率を引き下げる副次的効果をもつからである。このことについては稿を改めて論ずる予定である。また、飛騨国は山国でありその周囲のほとんどを険しい山岳で囲まれ、古地図に大部分の道路は2、3月ともなれば牛馬は通行不可能との添え書きがある³⁾。僅かに南の美濃国郡上郡と行き来できるにすぎない。そのためか高山外部からの移入人口の大半は飛騨国の村の出身であった。すなわち飛騨国はルーズな閉鎖圏であり、人口移動も高山とそれ以外の飛騨国の村落の間に限定されることが多いのである。

利用する史料は高山を構成する3町のうち弐之町の1773年から1871年までの99年間分と、壺之町の1819年から1871年までの53年間分の宗門人別帳である。歴史人口学の史料としての高山の宗門人別帳の価値は前号で詳細に分析しておいたので、それを参照されたい⁴⁾。三之町は史料の残存率が僅かであるので、人口の約三分の一を占めるこの町は残念ながら今回も分析から割愛せざるを得なかった。

分析方法としては以下の手段をとる。前号で述べたように弐之町と壺之町は史料初見の年代が異なるので別個の分析対象とする。またこれも前号で解明したように、この2町の成立過程において古くから町人町で

3) 岐阜県編『岐阜県史、史料編、近世四、付録村・町絵図共』1968年を参照。

4) 佐々木陽一郎「飛騨国高山の宗門人別帳」『千葉大学経済研究』第16巻第3号、千葉大学経済学会・千葉大学総合政策学会、2001年。

あった地域と、飛騨国が幕府直轄領となってから新しく成立した町とでは、構造や性質が異なるので、それぞれを新旧両町に分割し式之古町、式之新町、壺之古町、および壺之新町に4分割して分析単位とする。後述するように両町とも古町は裕福であり、新町は貧しい。この貧富の格差が人口変動にどのような影響を与えるかという点も、本論文の分析の主流をなす⁵⁾。さらにこれも前号で述べたことであるが、1772年に時の大原代官によって実施された検地が徹底したものであって、その後の高山の石高は微増にとどまり、したがって石高はいわば一定の尺度としてストックではあるが一つの経済指標として有効なので、町人を高持層と無高層に分割する。ただし分析を進めていく過程で明らかになったことであるが、同じ高持層でも10石以上層と10石未満層とでは人口学的に有意な差があることが判明したので、高持層を10石以上層と10石未満に2分割する⁶⁾。また年号は西暦年号を、年齢は当時の習慣であった数え年を使用する。

1. 経済指標としての石高

図2—1は式之町と壺之町の古町の石高を比較対照したものである。各町人が高山町内で所有する石高は表2—1に示すように、高山の石高が少ないため極めて小規模であり、大部分は村方で所有する農地である。さて図2—1を検証してみるとほぼ全期間を通じて式之古町が圧倒的に壺之古町を上回っている。僅かに1833年に式之古町が422.3石であるの

5) 都市を裕福なパリッシュと貧しいパリッシュに分けて比較検討する作業はフィンレイが16世紀から17世紀のロンドンについておこなっている。Roger Finlay, *Population and Metropolis The Demography of London 1580-1650*, Cambridge University, 1981.

6) 農村人口を階層に分けて分析する作業は速水融が美濃西条村についておこなっている。速水融「人口学的指標における階層間の較差：濃州西条村の農民」『徳川林政史研究紀要』昭和47年度、徳川黎明会、1973年。

図 2—1 古町の石高（5 年移動平均）

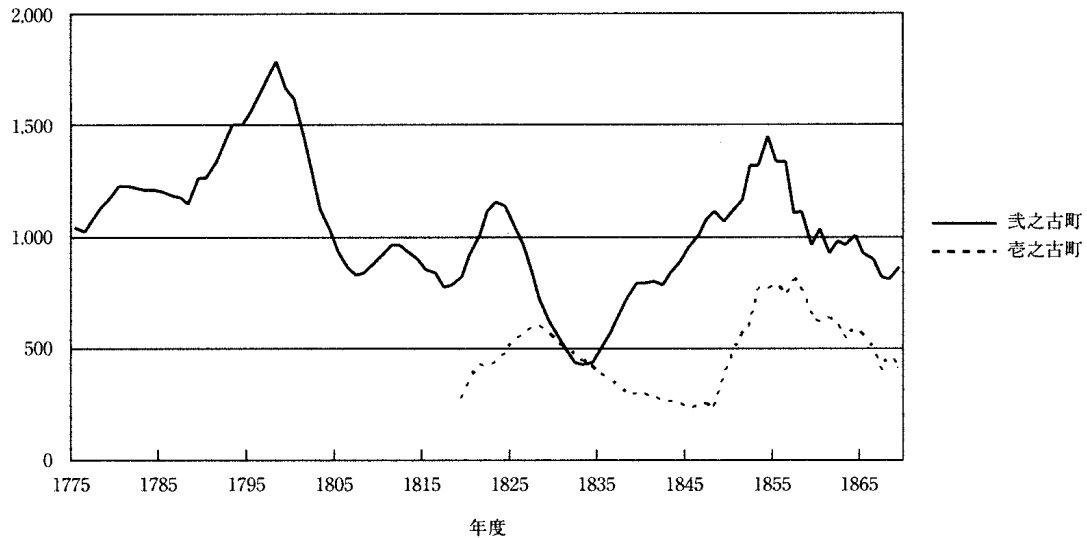
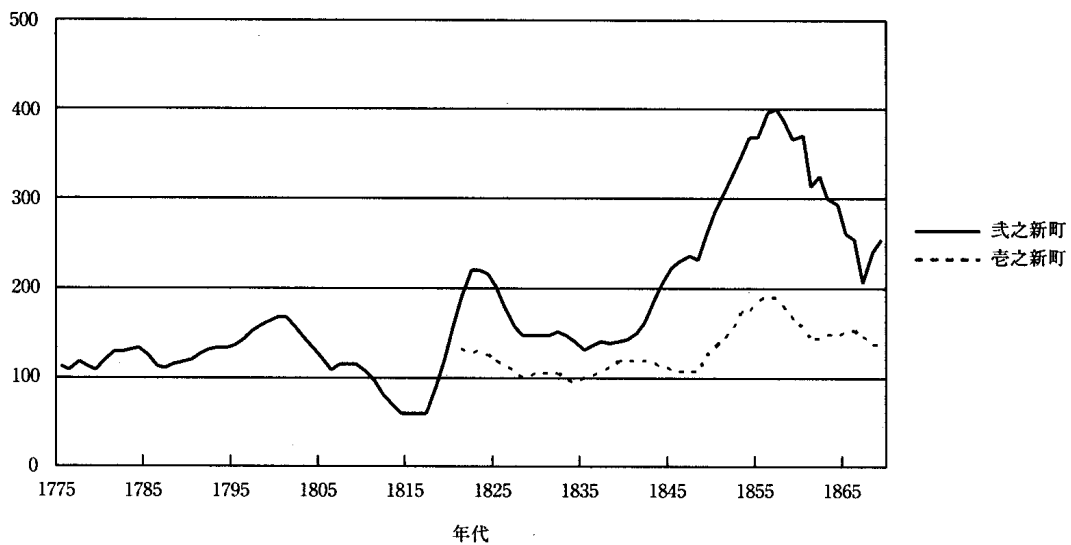


表 2—1 1773年における高山の石高および反別

壺之町村	147.9石	14町 3 反 4 畝15歩
弐之町村	155.0石	15町 1 反 9 畝 5 歩
三之町村	181.9石	19町 4 反 2 畝22歩

にたいし、壺之古町が447.3石と1年のみ壺之古町が弐之古町を凌駕しているのにすぎない。両者とも共通しているのは飢饉のあとしばらくしてから石高が増加している。すなわち弐之古町は3のピークがあり最初1798年に1,782石余と全期間を通じて最大の数値を示している。これは想像の域をでないが、天明の飢饉の間に生活のたしにと飛騨国の農民が質入れした土地がこのころになって質流れをした結果であろうと思われる。第2のピークである1824年の石高増加は後述するようにこの時期の不作がもたらしたためであろう。その後弐之古町の石高は急速に減少し、さきに述べたように1833年には壺之古町を僅かながら下回る。これを最底にして1854年には1,450石余にまで回復し1798年には及ばないが後期におけるピークを形成するのである。これも天保の飢饉の影響であろう。壺之古町は前半の史料が欠如しているので、この時期については不明であるが1857年に808石余と最大値を記録している。これも天保の飢饉の

図2—2 新町の石高 (5年移動平均)



帰結であるとするのは言いすぎであろうか。

それでは新町はどうであろうか。図2—2は新町の石高をプロットしたものである。式之町は古町ほど明瞭ではないが全期間を通じて3回のピークの時期があり、しかも時代を経るごとに山は高くなり1856年には396石余と最大の値を記録する。すなわち式之新町は途中で3回の高まりを経験しながら趨勢としては増加傾向にあった。これに対して壺之新町は式之新町が停滞している同じ期間は横ばいしているが、1849年ごろから増加に転じ、1856年には191石余と最大値を記録した。それでも壺之新町は式之新町の396石に比べて遠く及ばない。

縦軸の目盛りに着目すると目盛りが古町は最大で2,000石であるのに対して、新町のそれは500石であるにすぎない。古町は新町よりはるかに裕福である。さらに式之町は壺之町より豊かである。

それでは1世帯当りの平均石高はどうであろうか。図2—3は式之古町と壺之古町の総石高を全世帯で除したものである。式之古町では1775年の3.95石から始まり1798年の7.00石まで一貫して上昇している。やはり天明の飢饉の影響があるのであろう。

一旦1818年の2.94石まで下落するが、再び1823年の4.02石まで回復す

図2—3 古町世帯当り石高（5年移動平均）

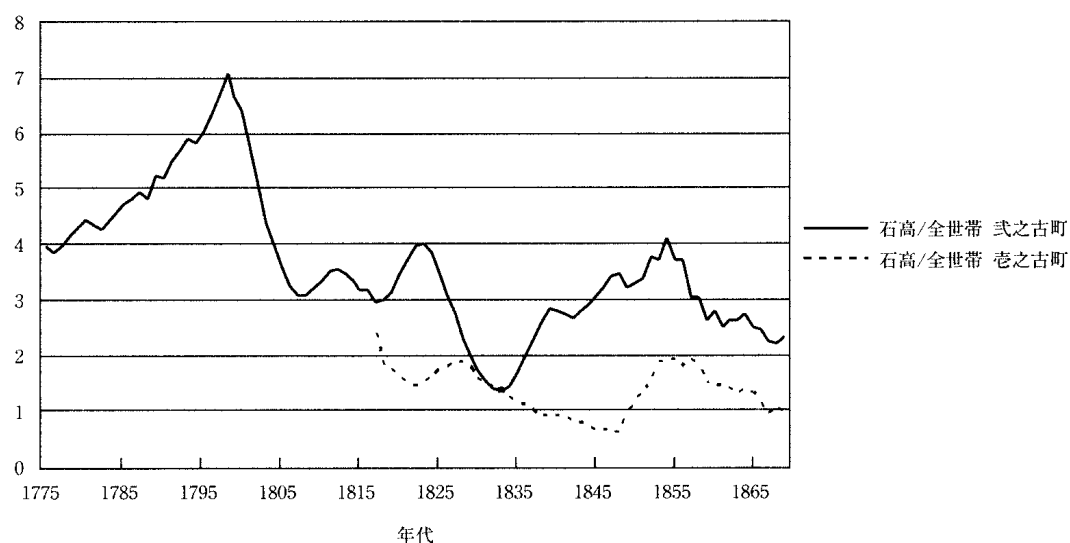
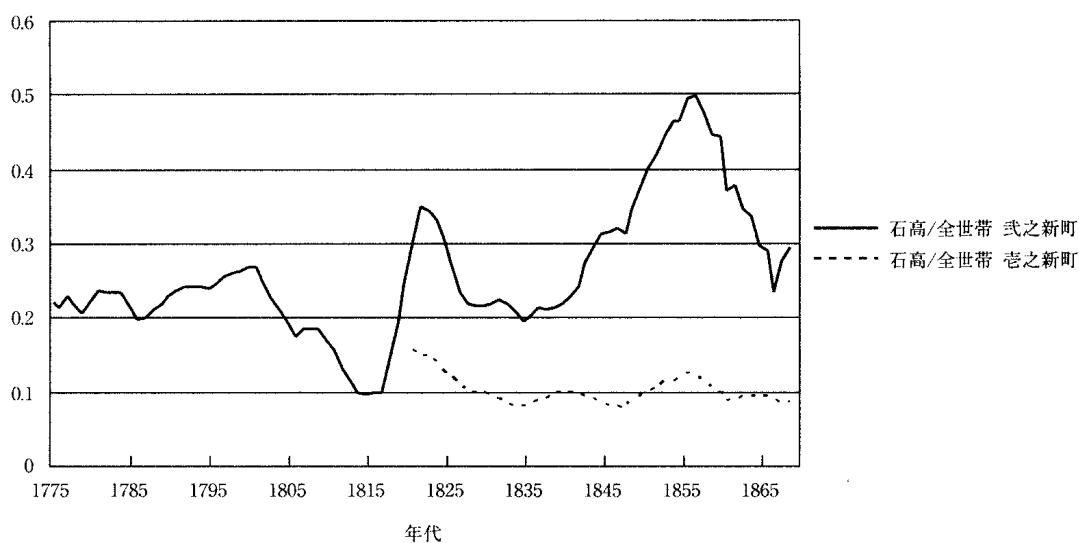
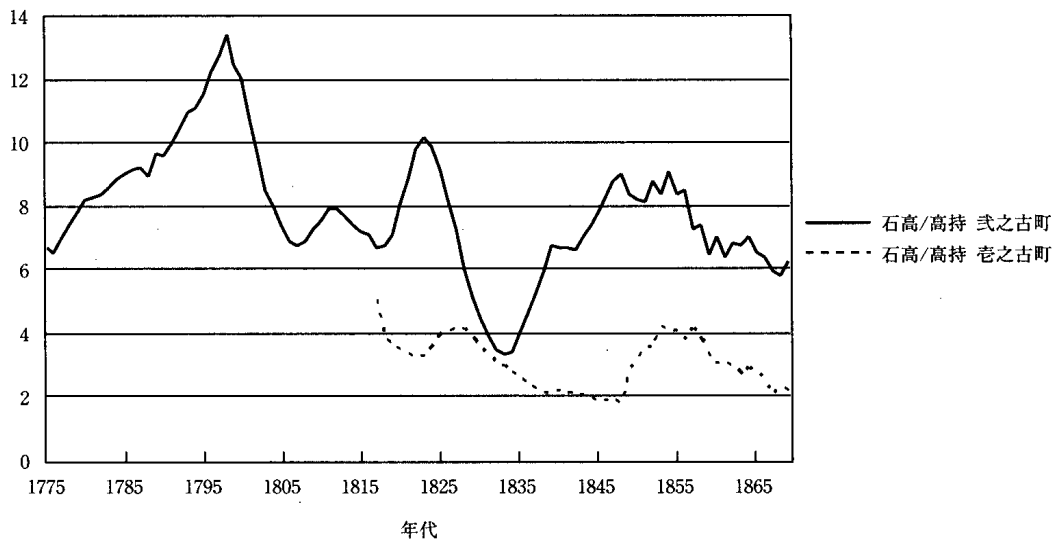


図2—4 新町世帯当り石高（5年移動平均）



る。これは後述するようにたこの期間の飛騨国の農業生産不振と関係があるのであろう。その後減退が1837年の1.37石まで継続する。しかし天保の飢饉の直後から上昇を再開し、1854年の4.07石まで回復する。しかし前期のような高い石高ではない。壺之古町の石高推移を観察すると、1821年の1.54石からスタートして1848年の0.59石まで減少を続ける。その後天保の飢饉の影響をおくればせながら受けて石高は上昇し始め1857年の1.91石の最大値に達する。しかし1832年を例外として常に壺之古町

図2—5 古町高持当り石高 (5年移動平均)

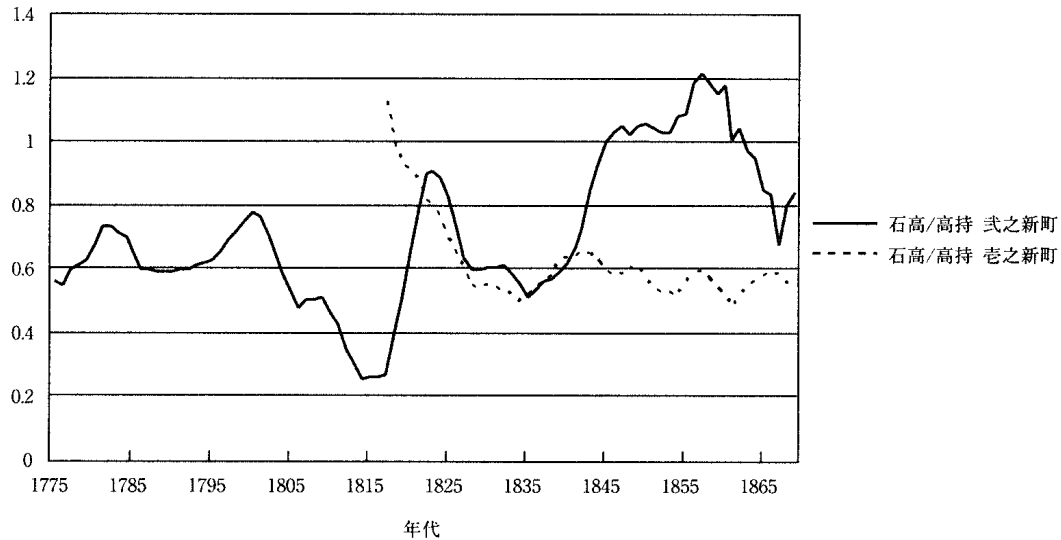


は弐之古町の下位に位置しており、また天保の飢饉の恩恵を蒙る時期も弐之古町より少々遅れており、同じ高持でも弐之古町と壺之古町とはかなり異質であるといえるだろう。

つぎに新町の動向をみてみよう。0.22石で始まる弐之新町は僅かな上昇傾向を示しながら1800年までは0.20石台にとどまり、1800年から下降を初め1816年の0.10石の最低水準にまで落ち込んだ。しかしその後は急反転をみせ1822年には0.35石に達する。ところが古町と同様天保の飢饉時には石高の減少が始まり1838年には0.20石と振り出しに戻る。だが天保の飢饉の恩恵は古町より大きくその後の回復は目覚しく、1857年には0.50石に達する。全世帯を分母とする世帯当り石高では古町と新町では正反対の経緯を辿るが、両者は文字とおりの桁違いであり、古町は依然として裕福であり、新町は貧しいことに変わりない。壺之新町は弐之新町よりさらに貧しくしかも初期は一貫して低落し1846年には0.2石を割る。その後は急上昇して1855年には0.13石まで回復する。しかしグラフでも理解できるとうに4町のなかでは最も貧しいといえる。

それでは分母を高持層に限定したときはどうなるであろうか。図2—5は弐之古町と壺之古町について、分母を高持としたときの世帯当たり

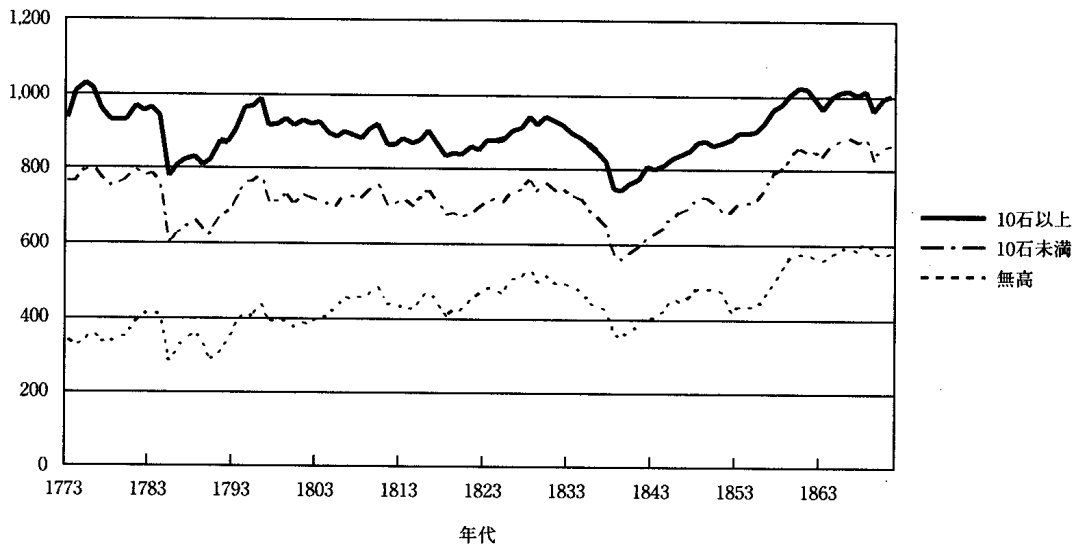
図 2—6 新町高持当り石高 2（5 年移動平均h）



石高推移である。一見すればわかるように目盛りの単位が変化しただけで、全体の傾向は全世帯を分母とした場合とほとんど変わらない。弐之古町は6.6石から始まり1798年に13.8石と2倍以上の増加をとげ、その後一挙反転して1808年に6.6石と最初の水準に戻る。しかし1823年には10.1石と第二の上昇を経験する。その後1833年に3.8石と期間中最低の値を示すが、天保の飢饉後第三の上昇があり9.0石台に達する。その後は緩やかな減少に転じ1871年の6.1石で終わっている。壺之古町は5石台から始まるが長期低迷を1850年まで続け2石を割る。その後急上昇して4石を超えるが、再び減少局面に入り1871年に2.1石で終了している。分母を高持に限定することにより、弐之古町の壺之古町に対する優位は一層高まり、弐之古町が壺之古町を下回ることは一度もない。

図 2—6 は新町を比較したものであるが、全世帯を分母にしたときと同じことがいえる。すなわち、弐之新町は起伏を繰り返しながら上昇趨勢にあり、僅かに年度末にいたって急落するにすぎない。他方壺之新町は前半は低下し分母を世帯数とするとときと傾向は変わらないが、後半は停滞している相違が目立つ。

図2—7 式之古町人口推移



2. 人口の推移

さてそれでは上記のような経済格差がある4町はどのような人口推移を辿ったのであろうか、個々に吟味していくことにする。図2—7は式之古町の人口推移である。この図は下から無高層、10石未満層そして10石以上層の順に積み上げているので、各層の人口はそれぞれグラフの幅で表されている。まず総人口から観察すると1773年の934人から翌年の1,008人に急増した。これはグラフでわかるように、10石以上層の急激な増加に負うところが大きい。その後は減少し始め1785年には781人にまで低落した。明らかに天明の飢饉の影響である。そして飢饉の影響が去ると人口は増大し、1796年には992人にまで回復する。その後人口は緩やかな長期減退傾向に転じ、1820年のボトムに至る。この間の事情について「飛騨編年史要」⁷⁾はつぎのように述べている。1798年「暴風雨あり、田畑の損害多し。」、1800年「飛州頃日痢病流行して死者多し。」、1803年「飛州麻疹大流行す。」、1811年「暴雨出水、高山の中橋鍛冶端流

7) 岡村利平『飛騨編年史要』住伊書店、1921年。

失し、其他国中所々損害あり。」、1814年「飛州洪水、所々損所多し。」、1821年「飛州晩霜大いに臻り、桑葉を損す。」とあるように寛政、享和、文化、文政の各時代に発生した天候不順や流行病が飛騨国を襲い、このことが飛騨国の人口、ひいては高山の人口増加を妨げることになったと思われる。その後人口はやや急増し1828年に極大の944人に達する。そして天保の飢饉の襲来による被害が最大である1838年には744人にまで減少する。ここで注目すべきことは飢饉の始まる以前から人口が減少し始めたことである。同じく「飛騨編年史要」を引用すると1831年「頃日米価騰貴す。窮民一揆を起こして広瀬屋利兵衛の別荘を打毀す。」、1832年「高山川原町大阪屋佐兵衛控屋より出火し、川原町、中町、西町竈数二百二十七軒焼失す。」、**「高山二之町中丁福島屋五右衛門火を失し、三町不残、片原町まで竈数六百軒餘焼失す。」**、1833年「飛州、頃日霧雨止まず、作物不熟。」、1834年「飛州飢饉。乞食巷に満つ。」とここまでは天保の飢饉の前兆である。そして1836年「五月某日。飛州此頃雨多く、六月土用に入りて尚止まず、気温低下して老幼綿入を着す。諸作不熟。栗枹の実まで皆熟せず。是冬。山中村々の窮民、乞食のため高山町へ入来るもの千人内外あり。飢寒に因みて倒死するもの相次ぐ。」、1837年「是春。村々農民、食糧の欠乏に因むこと愈甚だし、争ふて草根木芽探りて食ひ、餓莩道路に充つ。五月下旬。疫病頃日より流行し、餓死者、疫死者相次ぎ、野にも里にも死屍横はる。」とこの飢饉の有様を生々しく伝えている。人口も1839年には744人に減少している。しかし飢饉の影響が去ると人口は急速に回復し、1860年に観察期間を通じて最大の規模である1,025人に達する。その後は緩やかな減少期に入り1871年の1,004人で終了している。すなわち初年度が1,000人に近い900人台であり、最終年度が1,000人を僅かに超えるにすぎず、グラフをみればわかるように、ほとんどの期間を900人台もしくは800人台に終始し、いわば鍋底状の人口推移である。換言すれば弐之古町は高山の人口増加にほと

んど寄与することがないといえる。

つぎに階層別にみると10石以上層は1773年の173人から翌1774年に246人に、増加率で実に142.2パーセントと急増する。天明の飢饉以前の1780年に163人の極小の人口にまで低下する。その後は飢饉の最中にもかかわらず1781年に増勢に転じ、1831年の185人にまで回復する。それから軽微な減少が始まり、1848年には151人と期間中最低の水準にまで下落する。しかし、1851年には188人と急騰をみせ、翌1852年に197人の極大に達する。その後は緩やかな減少期に入り1871年の138人で終了している。全過程をまとめると1774年の突出、1780年までの急速な落ち込み、1831年に至るまでのかなり緩慢な増加、1841年に至るまでの最初は緩やかな減少、同じく天保の飢饉時の緩やかな低下とその後の反転、そしてその後の軽微な減少と前後6回にわたり増減を繰り返しながら長期的には人口低下趨勢にある。10石未満層は424人で始まり1775年には454人へと微増がある。1776年から人口減少が始まり、1788年の299人でようやく下げ止まるようにみえるが、その後も一進一退を繰り返しながら趨勢としては減少傾向にあり、1830年の251人を極大として1839年の209人に低下する。その後の回復もはかばかしくなく1851年に215人にまで増加するに過ぎない。しかし1852年に264人の急騰があり、これは無高層の一部が高持になったためと思われる。さらに1865年の294人を極大として1871年の289人で終了している。この両者を併せた高持層をみると初期に597人から689人に急増した後、1788年の471人まで急速に低下しその後回復基調に入り1795年には569人に達する。しかしそれから1850年の385人に至るまで、多少の起伏はあるものの極めて緩慢な低下傾向になる。この間天保の飢饉の影響は微弱にとどまる。それが1852年から461人と急反転し1856年には475人にまで上昇し1861年まで440人台を維持するが、その後はやや急速な下落が始まり1871年の427人で終了している。すなわち10石以上層も10石未満層も途中で起伏があるにせよ、

表 2—2 式之古町期間年平均成長率（％）

総人口	10石以上	10石未満	高持	無高
期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率
1773—1774 7.92	1773—1774 42.20	1773—1775 3.13	1773—1775 7.43	1773—1776 4.17
1774—1785 -2.29	1774—1780 -6.63	1775—1788 -3.11	1776—1788 -2.88	1776—1788 -2.72
1785—1796 2.20	1780—1791 2.15	1788—1830 -0.42	1788—1795 2.74	1785—1792 2.59
1796—1820 -0.69	1791—1815 -1.13	1830—1839 -2.01	1795—1850 -0.70	1792—1803 1.67
1820—1839 0.64	1815—1831 1.03	1835—1838 -2.65	1835—1838 -2.65	1803—1826 0.99
1835—1838 -5.05	1831—1837 -1.02	1838—1851 2.03	1850—1852 9.34	1826—1839 -2.80
1838—1860 1.54	1835—1837 -1.95	1851—1854 7.06	1852—1856 -1.52	1835—1839 -5.79
1860—1871 -0.19	1837—1840 2.79	1854—1865 0.98	1861—1871 -0.37	1839—1848 3.65
	1840—1852 0.34	1865—1871 -0.29		1848—1852 -3.27
	1852—1871 -1.95			1852—1866 2.50
				1852—1871 -1.95

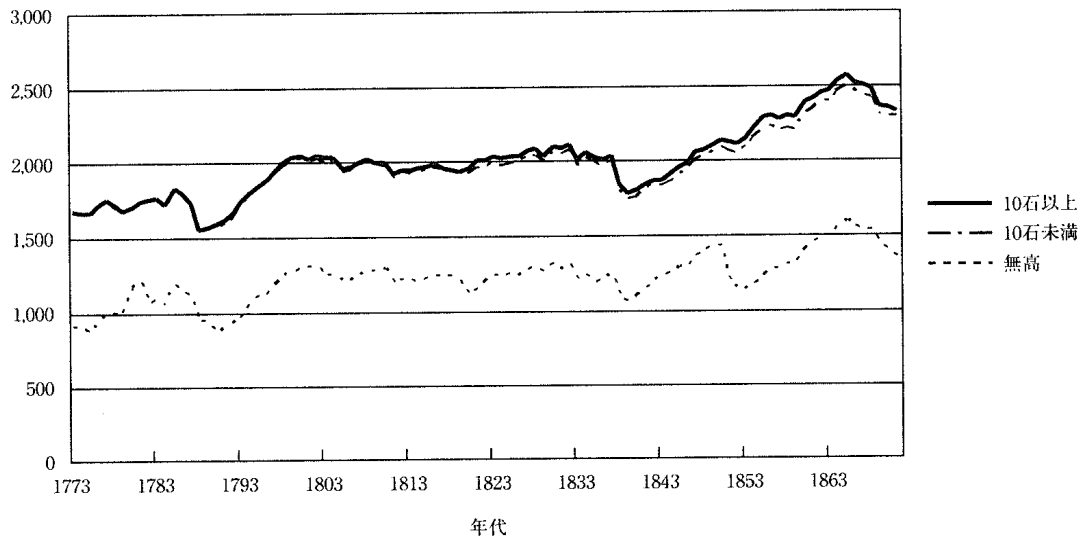
1774年ないし1775年の人口をピークとして前半はかなりの急落と回復、中期は極めて緩慢な減少、末期に突然の人口増大と緩やかな低下の経路を辿り、全体としては長期低落趨勢にある。

無高層は高持層より激しく変動しながら長期的な観点にたてば増加趨勢にあるといえる。337人で始まる無高層の人口は天明の飢饉で133人を失うが、その後の回復期で人口は増加し1792年には336人と当初の人口に復帰するのである。さらのその後も増加は続き1803年には403人と400人台にのせ、1826年には505人と初めて500人台に達する。ついで天保の飢饉以前から人口減少が始まり、1839年に349人にまで低下する。しかし飢饉が去ると人口は再び増加に転じ、1848年に482人にまで回復する。この増加趨勢は1852年に422人の一時的な後退で一頓挫する。これは無高層の一部が高持層になったためである。1853年には再び増加趨勢に復帰し、1866年には596人と最大人口に達する。以上みてきたように高持層は10石以上層も未満層も長期低落であり無高層は反対に長期的には増

加趨勢にある。すなわち無高層の増加分を高持層の減少分で相殺し、全体では人口は停滞するのである。

表2-2は各階層の人口推移のターニングポイントをえらび、その間の年平均成長率を算出したものである。さらに天保の飢饉の影響を示すために1830年代は重複して記載してある。またこの表でわかるように、人口増加と減少は原則として交互に現れるように時期を区分した。したがって各階層の時期は必ずしも一致しない。まず目につくのは初期の総人口の高い成長率である。これは主として10石以上層の急増によるものであることはすでに述べた。天明の飢饉の影響は全階層を直撃しそれが総人口の動向に影響を与えた。しかし、飢饉後の無高層の人口回復は目覚しく1785年から1792年の年平均成長率は2.59パーセントである。総人口は18世紀中にこの無高層の増加の影響を受けて成長率はプラスであるが、18世紀末から19世紀初期にかけて高持層の減少によりマイナス0.69パーセントと僅かに減少する。10石以上層と10石未満層はむしろ天明の飢饉以前に人口が減少している。これは10石以上層のそれに先立つ人口の急増の反動により激減したことと関係がある。天明の飢饉と天保の飢饉の中間期は前述した飛騨国農産物の低調によって、高持層も無高層も停滞し総人口でみれば1796年から1820年までマイナス0.69パーセントと僅かながら減少している。天保の飢饉時には無高層を除くどの層もそれに先立つ減少を示しているが、飢饉そのものに対する各層の反応は天明の飢饉と異なっている。10石以上層は僅かな減少、10石未満層はマイナス2.65と大きな減少であるが、無高層はマイナス5.79パーセントと大被害を受けている。しかしその後の回復は無高層が遥かに活発で、1848年から1852年にかけての中断期をはさんで、1839年から1848年にかけて3.65パーセント、1852年から1866年にかけて2.50パーセントと高い人口上昇率をみせている。これに比べると高持層は1850年から1852年の短期間に9.34パーセントと高い上昇率を一時的に経験したが、その後は微弱

図 2—8 式之新町人口推移



な減少率で終わっている。総じていえば初期を除いて高持層より無高層のほうが人口変動の振幅は大きい。

図 2—8 は式之新町の人口推移である。図 2—7 と同様各階層の人数を積み上げであるので、各階層の人口はグラフの幅で示される。10石以上層を表すグラフと10石未満層を表すグラフはほとんど見分けがつかないほど近接している。これはとりもなおさず、10石以上層の絶対値がきわめて少ないことに起因している。事実、10石以上層の99年間の平均人口は38.6人にすぎない。それで式之新町では10石以上層と10石未満層とをまとめて高持層として扱うことにする。

まず総人口は2度にわたる飢饉時の急速な短期間の低下と、その時期にはさまれた微増の時期、および最後の4分の1世紀に満たない期間の増加の時期と大きく4つの時期にわけることができる。また累計高持層は累計無高層の35.9パーセントにすぎず、人口推移に与える無高層の影響は大きい。1,674人で始まる総人口は1785年に1,831人と最初の極大に達する。それから天明の飢饉時に1,555人の最初の極小値に達する。飢饉に対する抵抗力の弱い無高層の多い式之新町では、被害の程度は式之古町より大きい。飢饉の影響が去ると人口は回復に転じ、1799年には

2,035人と初めて2,000人台にのせる。その後は1,900人台と2,000人台を行き来し、傾向としては微増であり、1832年には2,109人に達する。これは弐之古町のところで述べたように、飛騨編年史要の記述にあるこの期間の天候不順から生じた飛騨国の農産物不振と関係がある。それから弐之古町と同様天保の飢饉以前から人口は減少し始め、天保の飢饉時には1839年の1,781人まで低下する。天保の飢饉以後は急速な回復と成長が始まり、1865年には2,571人と期間内の最大人口を記録する。それ以後はやや急速に減少し1871年の2,331人で終了する。

高持層は767人で始まるが、これも弐之古町と同様天明の飢饉の始まる以前の1781年に529人にまで低下する。翌1782年には692人にまで回復するが、弐之古町とは異なり、天明の飢饉の影響を受け1787年には603人にまで減少する。飢饉の後は再び人口回復が始まり1790年に700人台に達し、1819年までは700人台を維持し1820年の856人というやや不自然な一時的増加を除けば、700人台と800人台を行き来し、1835年には836人というこの時期における極大値を記録する。やがて天保の飢饉が始まり人口も1843年に651人にまで低下する。弐之古町と異なる点は弐之新町では高持層といえども天保の飢饉の影響を強く受けていることである。その後人口の回復および増加が始まり、1851年には948人と天保の飢饉直前の水準を上回り、1855年には1,067人の最大人口を記録する。やがて人口は緩やかな減少局面に入り1871年の985人で終了している。弐之古町と異なるのは人口は多いが飢饉の影響をより強く受けることである。

無高層は907人で始まるが1781年には1,207人と1,200人台にのせる。やはり天明の飢饉の影響を蒙り1790年は863人にまで減少する。飢饉の影響が去ると人口は急速に回復増加し、1798年に1,227人と飢饉以前の水準に戻り1801年に1,300と1,300人台に達する。その後は前述した天候不順により人口は一進一退を繰り返しながら全体としては停滞する。やがて天保の飢饉が襲うと人口は1839年の1,053人まで低下する。飢饉の

表 2—3 式之新町期間年平均成長率 (%)

総人口		高 持		無 高	
期 間	成長率	期 間	成長率	期 間	成長率
1773—1785	0.75	1773—1775	2.26	1773—1781	3.64
1785—1788	-5.30	1775—1787	-2.35	1781—1790	-3.66
1788—1795	2.48	1787—1820	1.07	1790—1802	3.49
1795—1803	1.19	1820—1843	-1.18	1802—1832	0.01
1803—1832	0.13	1835—1843	-3.08	1832—1839	-3.04
1832—1839	-2.39	1843—1851	4.81	1835—1839	-2.89
1835—1839	-3.10	1851—1855	3.00	1839—1850	2.79
1839—1850	1.65	1855—1871	-0.50	1850—1854	-4.89
1850—1865	-1.62			1854—1865	2.48
1865—1871	-3.10			1865—1871	-2.71

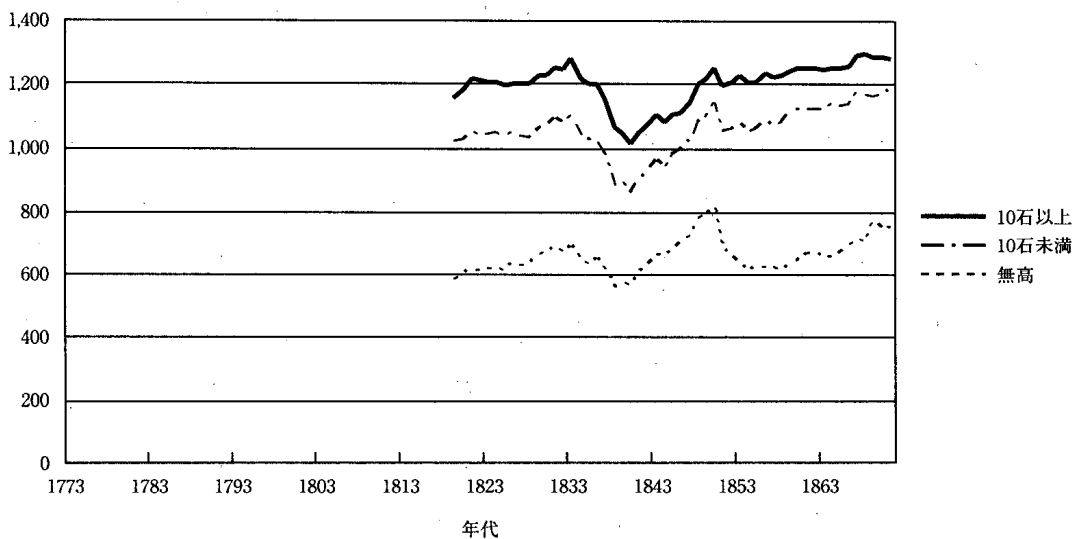
影響が去ると人口の回復は目覚しく、1844年には1,244人と飢饉直前の水準を回復し、1850年には1,425人とこの時期の極大値を達成するに至る。しかし古町の無高層と同様人口増加の趨勢は一時中断し、1854年には1,166人にまで下落する。この中断後人口増加は再開し1865年には1,587人と全期間を通じての最大値に至る。その後はやや急速な減少で1871年の1,356人で終了する。

つぎに式之新町の各階層の期間年平均成長率を表 2—3 に掲げる。期間のとりかたは古町と同様なるべく増加の時期と後退の時期が交互に現れるようにした。また天保の飢饉の影響を強調するため、トップからボトムまでの比較的長い期間と飢饉直前と飢饉以後最低の人口の期間とを重複させているのも表 2—2 と同じである。まず総人口は天明の飢饉に際してマイナス5.30パーセントの大被害を蒙る。しかし1788年から1795年までの間に2.48パーセントというかなりの回復を遂げる。その後18世紀末から1832年までの長期停滞に陥り、さらに天保の飢饉時にはマイナ

ス2.39パーセントと天明の飢饉ほどではないにしろ人口低下を経験する。また天保の飢饉直前の1835年から飢饉の最低時の1839年まではマイナス3.10パーセントの高率である。その後は1839年から1850年までの比較的長期間にわたって1.65パーセントの成長率を維持する。1850年から1865年まではマイナス1.62パーセントの比較的軽微な人口減少, 1865年から1871年まではマイナス3.10パーセントと大きな人口減少を経験する。全体を通じてみるなら天明の飢饉時の大減少とその後の人口回復と停滞, さきの飢饉ほど被害が少ないが天保の飢饉時における人口減少と, その後の回復とやや微弱な人口増加, さらにそれに続くやや大幅な人口減少がみられる。

高持層は初頭にそれぞれ2パーセント台の比較的大きな増減を繰り返す, それからは微増と微減が交互し, 天保の飢饉では無高層より大きな減少を経験する。1843年から1851年までは4.81パーセント, 1851年から1855年までは3.00パーセントと高い成長率をみせている。この高い増加率と減少率に古町の高持層との質的な相違が感じられる。無高層は前半は激しい増減を繰り返している。1773年から1802年まで絶対値で3パーセント台の増減が交互に出現している。その後停滞期に入り天保の飢饉

図2-9 壱之古町人口推移



時にはマイナス3.04パーセントの激減を経験している。それからは1850年から1854年までの例の理由によるマイナス4.89パーセントと天保の飢饉を上回る減少の時期をはさんで、趨勢としては成長傾向にある。

図2—9は壺之古町の人口推移である。階層を3に分けて下から順に無高層、10石未満、10石以上層と重ねているところはこれまでと同様である。まず全体から観察すると1819年の1,155人で始まる総人口は、1831年までに1,252人へと僅かに増加する。ついで1840年までに1,013人に減少する。明らかに天保の飢饉の影響である。しかしその後の回復もさえず1867年までに1,293人とやや初期人口を上回るにすぎない。ついで各階層をみると、まず10石以上層は137人で始まり1837年には僅かに増加して184人に達する。1840年には152人に減少し、式之古町のこの層が天保の飢饉の影響をあまり受けないのに、壺之古町では約17パーセントの被害を蒙っているのである。その後も減少は続き1846年には114人にまで下落する。そのあと人口は若干回復するが1871年には再び90人と期間中最低水準にまで低下する。ついで10石未満層もやはり1819年の437人から1841年の289人へと減退している。もとより天保の飢饉の結果である。しかし10石以上層と異なるのは1841年以後人口が増加していることである。1864年に481人に増加する。この両者の関係は図をみればわかる。すなわち10石以上層と10石未満層のグラフが時代とともに接近しているのである。

無高層は高持層と異なり浮沈の頻度が高い。1819年の581人で始まる人口は1831年に694人と僅かな増加がある。1838年に560人に激減している。もとより天保の飢饉の影響である。しかしその後の回復は著しいものがあり1850年に824人と期間中最大の人口を記録する。そして式之町で経験したことであるが、1850年から1854年にかけて610人と大減少を記録する。これは天保の飢饉より大幅な減少である。しかしその後1869年までに774人と回復があり、1871年の755人で終了している。

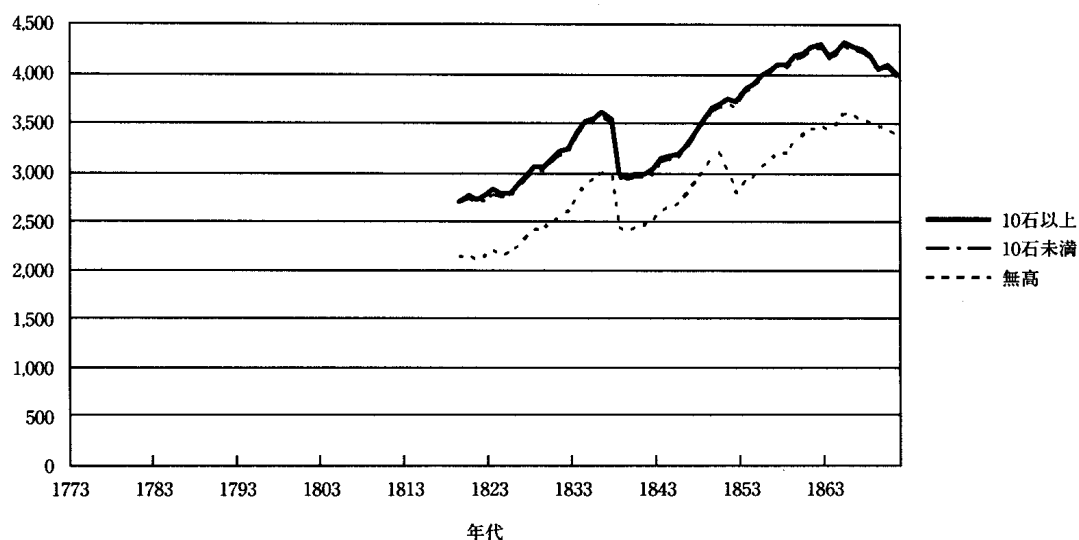
表2—4 壺之古町期間年平均成長率

総人口	10石以上	10石未満	高持	無高
期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率	期間 成長率
1819—1831 0.16	1819—1837 1.65	1819—1841 -1.86	1819—1833 0.20	1819—1831 1.49
1831—1840 -2.33	1837—1840 -1.58	1841—1856 3.18	1833—1846 -2.78	1831—1838 -3.02
1840—1868 0.88	1840—1850 -3.18	1856—1871 -0.40	1846—1854 4.80	1838—1850 3.27
1868—1871 -3.62	1850—1853 11.39		1854—1871 -0.70	1850—1854 -7.24
	1853—1871 -2.87			1854—1869 1.60
				1869—1871 -1.24

例によって各階層のトップからボトムにいたる各期間の年平均成長率を表2—4に示す。特筆すべき成長率は天保の飢饉以後の10石以上層のマイナス3.18パーセントの減少。その直後の11.39パーセントの増加、1850年以降の無高層のマイナス7.24パーセントの減少であろう。他方、どの階層も多かれ少なかれ天保の飢饉の影響を受けている。

図2—10は壺之新町の人口推移をプロットしたものである。みてのとうり10石以上層と10石未満層を表すグラフは密着している。これは10石以上層が年平均42.9人にしかならないためである。それで式之新町と同様10石以上層と10石未満層を併せて高持層として扱う。まず総人口であ

図2—10 壺之新町人口推移



るが1819年に2,711人と4町のうち最大人口で始まる人口は1834年に3,532人に達する。しかし1841年に2,991人へと激減する。もとより天保の飢饉の影響である。しかしその後の回復は目覚しく1848年には当初の人口を回復し、1862年には4,290人と期間中最大の人口に達する。続いて1869年に4,067人、1871年に4,004人と僅かに減少する。高持層は1819年より長期停滞を1850年まで続けているが、1851年に他の町と同様突然上昇に転じ1854年に958人に急増する。つづいてやや緩やかな減少局面に入り、1871年の606人で終了する。なお天保の飢饉の影響はほとんどない。無高層は高持層より浮沈が大きく1819年に2,121人で始まる人口は1836年に2,994人に増大する。1839年には2,395人に減少する。明らかに天保の飢饉の影響である。飢饉の影響が去ると人口は増加に転じ1848年に3,015人と3,000人の水準を越え、さらに1850年に3,192人へと増加する。しかし例のように1852年に2,800人と一時的な後退がある。しかし再び人口は増加に転じ1865年に3,582人と全期間中最大に達する。そして1871年に3,398人で終了している。壺之新町は高持層に比し無高層が圧倒的に多く、延べ人口で比較すると1対81.0であるので、同町の人口推移は無高層のそれではほぼ決まってしまう。また、壺之町の古町も新町もグラフでみると基本的に人口増加の趨勢にあり、それが飢饉や1850

表 2—5 壺之新町期間年平均成長率

総人口		高持		無高	
期間	成長率	期間	成長率	期間	成長率
1819—1834	1.78	1819—1850	-0.32	1819—1836	2.05
1834—1841	-2.34	1850—1854	17.53	1836—1841	-3.98
1841—1865	1.65	1854—1871	-2.66	1841—1850	3.01
				1850—1853	-2.90
				1853—1865	1.71
				1865—1871	-0.88

年代の低下で一時的に中断されるという感がある。

表2—5は壺之新町期間年平均成長率である。総人口は初年から年率1.78パーセントという比較的低い率で1834年まで増加している。1834年から1841年までのマイナス2.34パーセントはもちろん天保の飢饉の影響である。その後の回復率は年平均1.65パーセントと初期成長率より劣るが、1865年までの長期にわたって成長したため、人口は4,200人台にまで増加する。高持層は初年から1834年まで微小な増加にとどまり1850年までは僅かに減少している。しかしそれまで500人台である人口は1851年に一挙に763人にはねあがり、これが17.53パーセントの増加率をもたらす。これら新興高持層の供給源は無高層であり、そのため無高層の人口は一時的にせよ減退するのである。無高層は1836年まで2.05パーセントのかなりの成長率をもって増加しているが、1841年までに天保の飢饉の影響でマイナス3.98パーセントの減少という大打撃を受ける。しかし飢饉後の回復は著しく、1850年まで3.01パーセントの高成長率を維持する。1850年から無高層から高持層への移動がありマイナス2.90パーセント減少するが、1853年から1865年まで長期にわたる1.71パーセントの成長率で3,582人の最大人口を記録する。

つぎに階層別人口増加寄与率を検討してみよう。表2—6に示すように弐之古町の高持層は同町の人口増加に大きくマイナスの貢献をしている。壺之古町は10石未満層が微小な貢献をしているので高持層の負の貢

表2—6 階層別人口増加寄与率

町	弐之古町	弐之新町	壺之古町	壺之新町
10石以上	-50.0		-36.8	
10石未満	-192.8		0.8	
高 持	-242.9	33.2	-35.9	1.3
無 高	342.9	66.8	135.9	98.7

献は弐之古町より少なく10分の1程度で済んでいる。弐之新町では無高層のウエイトが高いので66パーセント以上は無高層の貢献による。壺之新町では人口の大部分を無高層で占めているので人口増加は無高層によるものである。ここで古町と新町の高持層の特質の相違が読み取れる。すなわち古町の高持層は年を経るにしたがい次第に減少する階層である。そしてそれは表2—1で示したように限られた宅地面積で一定の地所を維持する、いやそれどころか一軒当りの面積を増加させるために、新入の人口を拒否するいわば排除の論理をはたらかせているのである。また古町の借家はその面積から察するに一戸建ちであると思われる。したがって古町の人口収容数は増加しないのである。これに対して新町、とくに壺之新町の高持層は古町に比して相対的にも絶対的にも少なく、そのような論理がはたらかず、新入の世帯を迎え入れることをためらわず、僅かながらも上昇するのである。また新町の無高層は新町の石高から察して、大部分がおそらくいわゆる長屋形式の集合住宅であり、さらに前稿で述べたように新町は外延的に拡大しており、増加人口の多くはそのような新興地にも吸収されと考えられる。いずれにせよ、この問題は都市の人口増加が宅地という視点からいかに可能であるかという点で重要なので稿を改めて論ずる予定である。

つぎに総延べ人口の角度から見た各町の構成を表の2—7として掲げる。

表2—7 延べ人口からみた高山の構成（括弧内は総数に対する百分率）

	10石以上	10石未満	高持	無高	合計
弐之古町	17,368(3.2)	28,699(5.3)	46,067(8.6)	43,472(8.1)	89,539(16.6)
弐之新町	3,803(0.7)	74,402(13.8)	78,205(14.5)	119,872(22.3)	198,077(36.8)
壺之古町	7,668(1.4)	21,033(3.9)	28,701(5.3)	34,968(6.5)	63,669(11.8)
壺之新町	2,277(0.4)	33,391(6.2)	35,668(6.6)	150,966(28.1)	186,634(34.7)
合計	31,116(5.8)	157,525(29.3)	188,641(35.1)	349,278(64.9)	537,919(100.0)

表2—8 諸都市の年平均成長率

都 市	開始年度	終了年度	成 長 率
式之古町総人口	1773	1871	0.07
式之古町10石以上	1773	1871	-0.39
式之古町10石未満	1773	1871	-0.18
式之古町高持	1773	1871	-0.34
式之古町無高	1773	1871	0.55
式之新町総人口	1773	1871	0.34
式之新町高持	1773	1871	0.25
式之新町無高	1773	1871	0.40
壺之古町総人口	1819	1871	0.34
壺之古町10石以上	1819	1871	-0.31
壺之古町10石未満	1819	1871	0.00
壺之古町高持	1819	1871	-0.18
壺之古町無高	1819	1871	0.51
壺之新町総人口	1819	1871	0.75
壺之新町高持	1819	1871	0.01
壺之新町無高	1819	1871	0.91
上田両町 ⁸⁾	1731	1768	-0.47
上田寺社門前 ⁹⁾	1731	1765	-0.39
秩父大宮郷 ¹⁰⁾	1774	1875	0.02
郡山上町 ¹¹⁾	1782	1870	0.90
甲府三日町 ¹²⁾	1672	1870	-0.14

8) 以下の町は下記の文献によって筆者が計算した。

9) 上田両町は上田城下町の一部である。深井甚三「近世中期の城下町人口動態について—信州上田城下町の場合」東北文化研究室紀要『東北大学日本文化研究所報告』通巻18集，東北大学日本文化研究所，1977年。

10) 鬼頭 宏「近世後期地方都市の再生産力—秩父大宮郷の場合—」『上智経済論集特別号』上智大学経済学会，1985年。ただし人口の実数の判明する最初の年度である1774年と最後の年度である1875年の101年間の人口成長率を計算した（筆者）。

11) 高橋美由紀「近世在郷町の労働市場と労働移動—陸奥国安積郡郡山町を中心に—」『社会経済史学』第65巻6号，社会経済史学会，2000年。

12) 土田良一「近世甲府三日町の人口動態」『人文地理』第31巻第6号，人文地理学会，1879年。

最後に宗門人別帳というマイクロデータから得られた、いくつかの都市の初年度から最終年度に至るまでの年平均成長率を表2—8で検討してみよう。高山では先の人口増加寄与率でみたように、両町の古町では高持はマイナス成長率である。僅かに弐之新町と壺之新町で高持層がプラスの成長率であるに過ぎない。とりわけ弐之古町の10石以上層のマイナス0.39が目立つ。4町とも無高層はいずれもプラスの成長率でとくに壺之新町の0.91パーセントがとびぬけて高い成長率である。結局、高山の人口増加は新町、そのなかでも無高層の増加に依存しているのである。

上田町は18世紀のみで、しかも全町ではなく、上田城下町を構成する町の一部のみが実数で記載されているに過ぎず、その他はグラフで示されているので成長率を計算できない。したがって表2—8に示す成長率は上田町の限られた町の、しかも特定の年代に限定されたものであることを断っておく。深井甚三によれば1706年の代替わりを契機として2歳以上を対象とする宗門改めに依拠したが、譜代奉公人以外の奉公人は除外されている。人口の急激な増加は寛文・延宝期にあり、元禄期に増加は停止し、宝永3年以降は明和元年まで人口は停滞し、文化期に漸増化が始まり幕末に至っている。該当する時期、とくに「宝暦に始まる町続き在方村を中心とする在方商店・在方商人活動が町方商圈を脅かし、町方市況不振をもたらし、人口減少を現象していった」と論じている。ここで取り上げた時期が上田町人口の最悪の時期で、人口減少も止むを得ないといえる。

秩父大宮郷で留意すべき点は「下男、下女などの奉公人は、文政7年（1824年）までは戸主の世帯に含めて記載されていたが、それ以後は別記されたようで、奉公人の動向は不明になった」ことである。しかし奉公人が総人口から除かれたか否かは文面では判然としない。また、「3歳以上の記録は少なからず見られる」ことも人口成長率の算出をやや曖昧にしているのも否定できない。さらに1750年を境にした人口減少を鬼

頭宏は宝暦期および天明期の凶作に帰している。また「1870年代の回復過程が1810年代に新たな成長過程に行こうとすることができなかったのは、このまちにおいていわゆる幕末の経済発展の恩恵をうけることができなかったためではなかろうか」と論じている。

郡山上町について高橋美由紀は「人口増加への正の寄与は、自然増加によるものより、社会増加によるもののほうが高い、(中略)時系列的に観察した場合、初期の負の寄与をしていた自然増加が正の寄与に変わり、社会増加は常に正の寄与をしていることから、後半の人口増加を加速させたといえる」としている。さらに都市の有配偶率が低いため出生率が低いとされていることにたいしては「史料上の单身奉公人の多さが直接に出生率の低下には結びつかない」として、実際には通い奉公人の多さが有配偶率の低下を防いでいると論じている。さらに「郡山流出入を時系列的に見た場合、常にどの年でも流入人口が流出人口を同程度上回り、郡山の人口増加の要因になっている」として、純流入人口が郡山の人口増加を支えていることを強調している。また、人口流入の要素として二本松城下町経済の停滞と結びついた郡山の経済的繁栄にあるとしている。

甲府三日町は甲府という町の一部であることは上田の場合と同一ケースである。土田良一は「三日町の人口は、最も古い寛文12(1672)年の788人を最高に以後減少していき、(中略)文化年間の460人台を最低とし、文政以降急速に増加し明治3(1870)年には享保期の水準である600人まで回復している」。しかし構成内容はかなり変化し、家持の階層分化と家持人口の減少がみられるが店借人口は中間では減少しているものの、文政以降増加に転じたとしている。そして三日町の「人口変動の内容は、家持年季奉公人や店借の減少から店借率の上昇や店借世帯規模の拡大による店借人口の増大に求められる」と結論づけている。

それでは高山の人口増減とくに後半の増加の原因は何によるものであ

ろうか。図2—11から図2—14まで4町の自然増加と社会増加をグラフにしたものである。自然増加も社会増加も実数を人口で除し千分比で表している。社会増加は壺之町、弐之町および三之町間の移出入は高山全体としてお互いに相殺されるものであるものとしてカウントせず、また高山の宗門人別帳がもともと記載対象としない地域（一部の寺院および郡代とその地役人）も同じ理由で除外する。その結果移入人口と移出人口は高山の外部からの移入と移出ということになる。また、傾向を辿るために5年移動平均とし、さらに4町の増減を比較するために縦軸の目盛りは統一してある。ただし壺之新町は変動幅が大きいので別にする。

4町ともに共通するのは自然増加の起伏が社会増加のそれより大きく、また社会増加は前半の限られた年代を別とすれば正の値をとることが多く、とくに天保の飢饉以後はそうである。

図2—11の弐之古町では天明の飢饉時の自然増加の低下を社会増加のプラスで補い、人口低下を小さいものとしている。飢饉後の人口回復期には自然増加および社会増加ともに正であり、人口増加を増幅させている。天保の飢饉に至るまでの人口停滞期は自然増加はプラスとマイナスの間を激しく上下し、社会増加はそのほとんどの時期がプラスであるが、

図2—11 弐之古町自然および社会増加（5年移動平均）

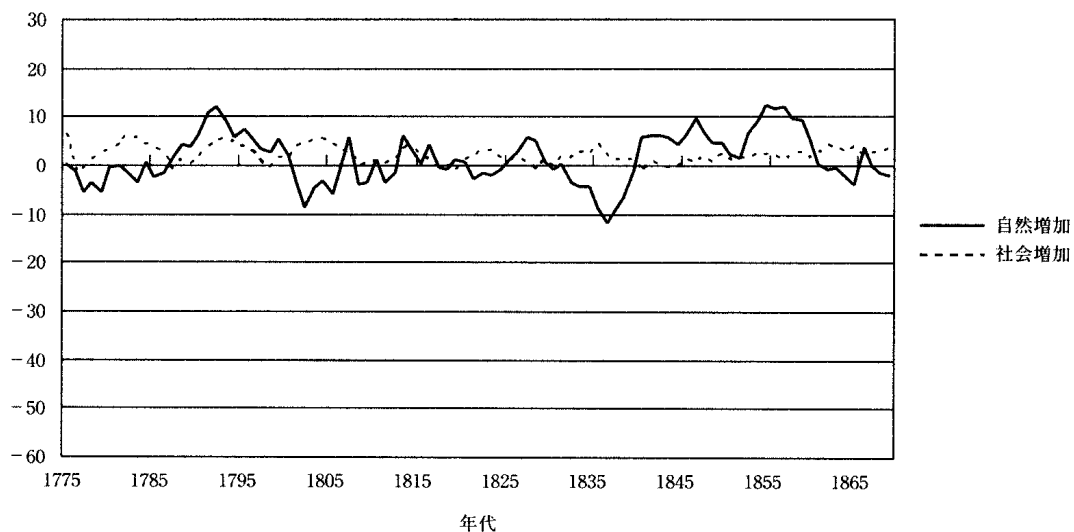
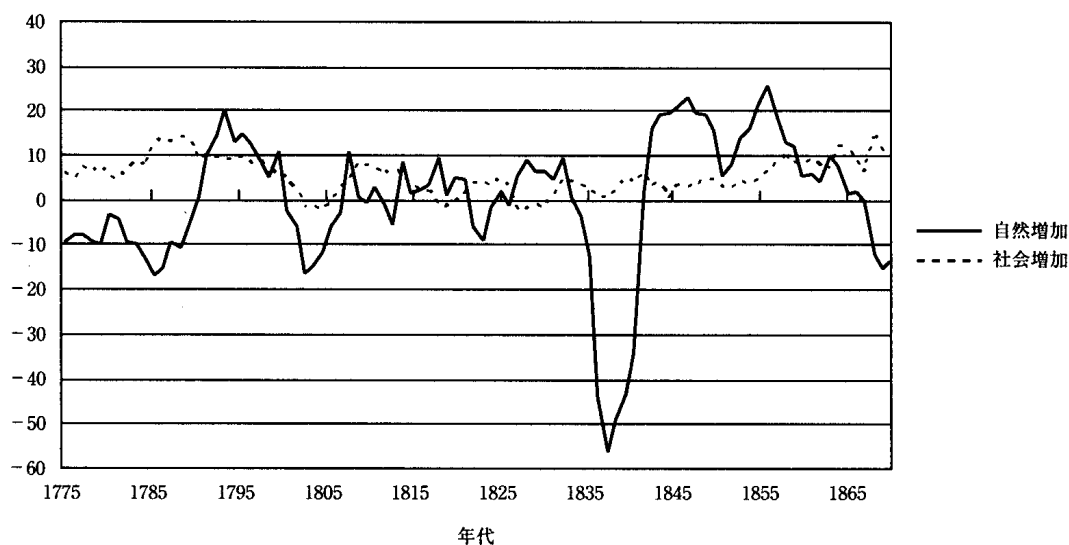


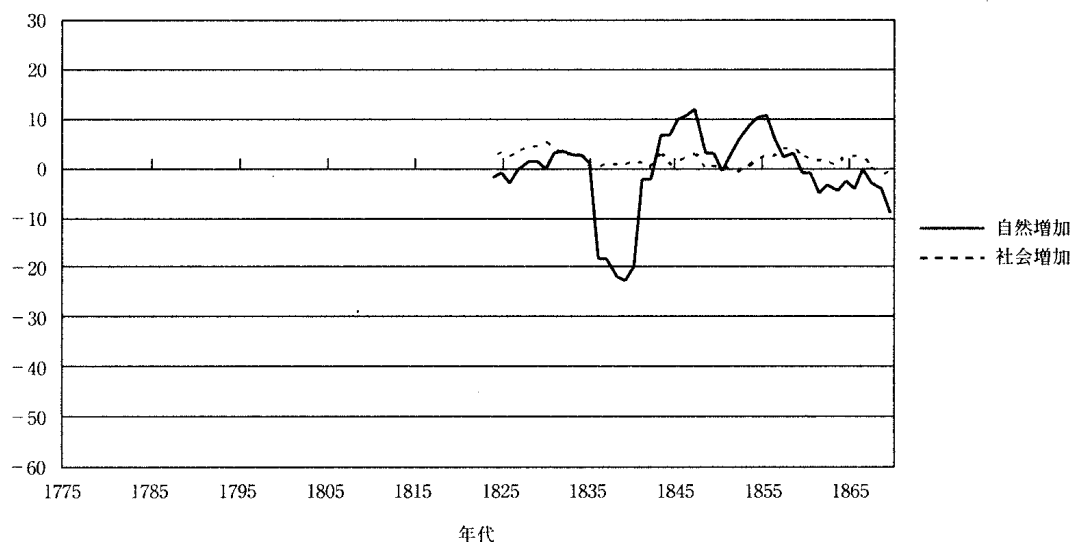
図2—12 式之新町自然および社会増加 (5年移動平均)



1817年, 1819年, 1828年はマイナスになっている。これが合成されて人口停滞となるのである。天保の飢饉時に自然増加は大きなマイナスになるが, 社会増加のプラスによって人口減少は緩和されている。飢饉後に自然増加は大きく上昇し社会増加は続伸を続け, この期間の人口回復と増加に著しく寄与している。また4町のなかで最も変動幅が小さいのもこの町の特徴である。

図2—12は式之新町の自然および社会増加のグラフである。ここでも天明の飢饉時の自然増加のマイナスを社会増加のプラスで人口減少を緩和している。そして天保の飢饉に至るまでの人口停滞期には自然増加がまず大きく低下し, その後は細かくプラスとマイナスの間を行き来しており, 社会増加はプラスの時期が多くマイナスの期間は少なく, 自然増加のマイナスを補っている。天保の飢饉時には自然増加は大きく低下し, その大きさは式之古町より40.0より大きい。しかしここでも社会増加は古町ほどではないにしても僅かにプラスであり, 人口低下を多少なりとも緩和している。天保の飢饉が去ると自然増加は大きく増加し1864年までプラスの値を保っている。そして社会的増加は1871年まで正の値を維持し, 飢饉後の人口成長に大きく寄与している。

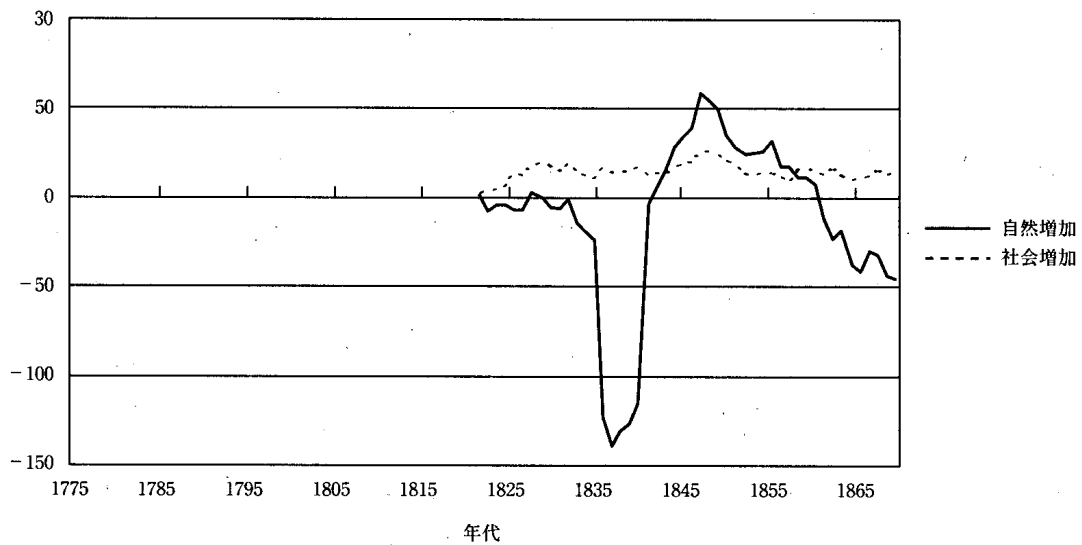
図 2—13 壺之古町自然および社会増加（5 年移動平均）



総じて壺之町は前半にまず天明の飢饉時に軽度の人口減少があり、とくに自然増加がマイナス5.0ないしマイナス10.0まで落ち込んでおり、社会増加のプラスが多少なりとも人口低下を和らげている。そして中間の人口停滞期は自然増加がやや激しく上下しており、とくに古町の1802年の落ち込みが甚だしい。しかし同期間の社会増加は千分の5以下であるが、ほとんどの時期に正の値を保っており、この期間の人口低下を緩和している。そして天保の飢饉時のとくに新町の人口減少は大きい、飢饉後は急速な成長に転じている。この町の人口増加はおもに天保の飢饉以後にそれも主として新町に集中しているのである。

図 2—13は壺之古町の自然および社会増加である。自然増加は僅かなマイナスで始まるがその後1834年までプラスになる。しかし天保の飢饉時には大きく低下し1838年まではマイナス22.6にまで減少する。これは同時期の壺之古町より2倍大きい。飢饉の影響が去ると自然増加もプラスに転じ、二つの時期に大きな自然増加がある。最初は1846年の11.8を頂点とするもので、次は1854年の10.8を中心とする時期である。しかし1859年を期に自然増加は再びマイナスに転じ、最終年度はマイナス9とやや大きな値となっている。社会増加は初期はかなり大きなプラスの値

図2—14 壺之新町自然および社会増加 (5年移動平均)



を維持しているが、天保の飢饉の間は1を下回っている。すなわち壺之古町の社会増加は弍之古町ほど人口減少に対する抑止力にならないのである。その後1857年に4.4の値を示すほど回復するが1866年から僅かなマイナスになり、先の自然増加の低下とあいまって最終年間のこの町の人口減少をもたらすのである。

図2—14に示す壺之新町は4町のなかで自然増加および社会増加の振幅が最も大きい。自然増加は天保の飢饉以前からすでにマイナスであるが、1836年に4町のなかで最も早く天保の飢饉の被害を受け、値もマイナス139.4と最大である。やはり天保の飢饉の影響が消滅すると自然増加率は急速にプラスに転じ1846年には58.4と4町のうち最大の値を記録する。しかし1861年から再びマイナスに転じる。社会増加は全期間を通じて正でありとくに天保の飢饉以後の1847年には26.0とこれも4町の中で最大の値を記録する。

壺之町の前半が欠如しているので1819年以降の比較になるが、以上をまとめると壺之町は自然増減の変動幅が弍之町より大きい。すなわち飢饉に対する抵抗力は弍之町より壺之町のほうが弱い。しかし、自然状況が改善されると壺之町は自然増加率は弍之町より大きくなり、とくに壺

之新町ではそうである。他方、社会増加は弍之町では前半に大きい値が散見されるが、大きくても弍之古町の1832年における6.9、あるいは弍之新町の1786年における14.2が最大で、その他の年代では古町でも新町でも10.0より小である。後半では古町も新町も値は小さくなり天保の飢饉以後の回復期でも1861年の古町の4.2、あるいは新町の1840年の6.4が最大である。要するに弍之町では前半より後半のほうが社会増加のテンポは鈍るのである。これに比して壺之町では先述したように末期にマイナスの値を示すが、天保の飢饉回復前後においてほとんどの時期で社会増加は正であり、古町では1857年の4.4と値はやや小さいが、新町では1841年以降1855年まで10.0以上の高率で推移している。いわば1819年以後においては弍之町より壺之町のほうがダイナミックであるといえる。

3. 性比

つぎに性比について検討してみよう。一般に江戸時代の都市は性比が高く、ために出生率が低いとされてきた。しかし例外はあるもので郡山

図2—15 弍之古町性比（5年移動平均）

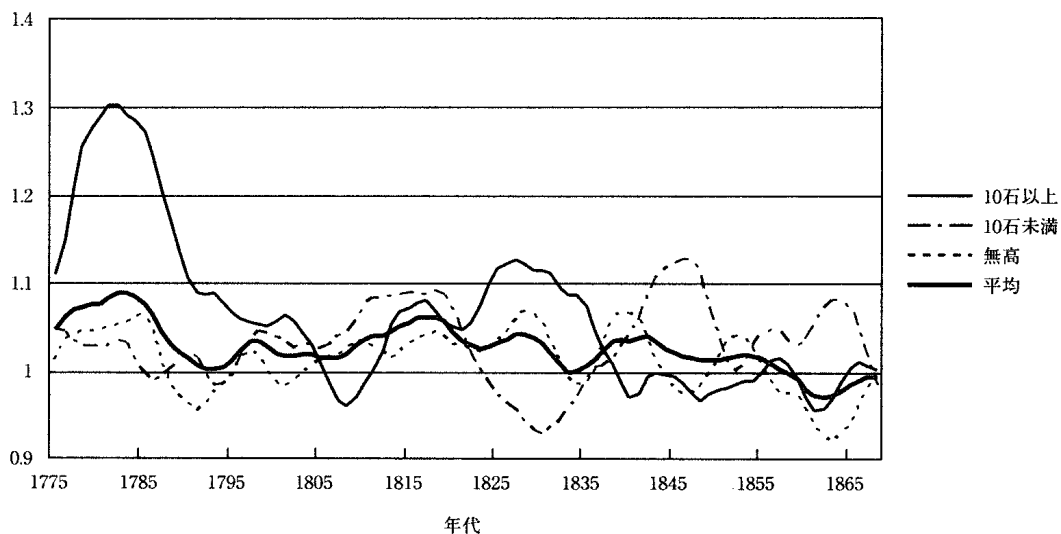
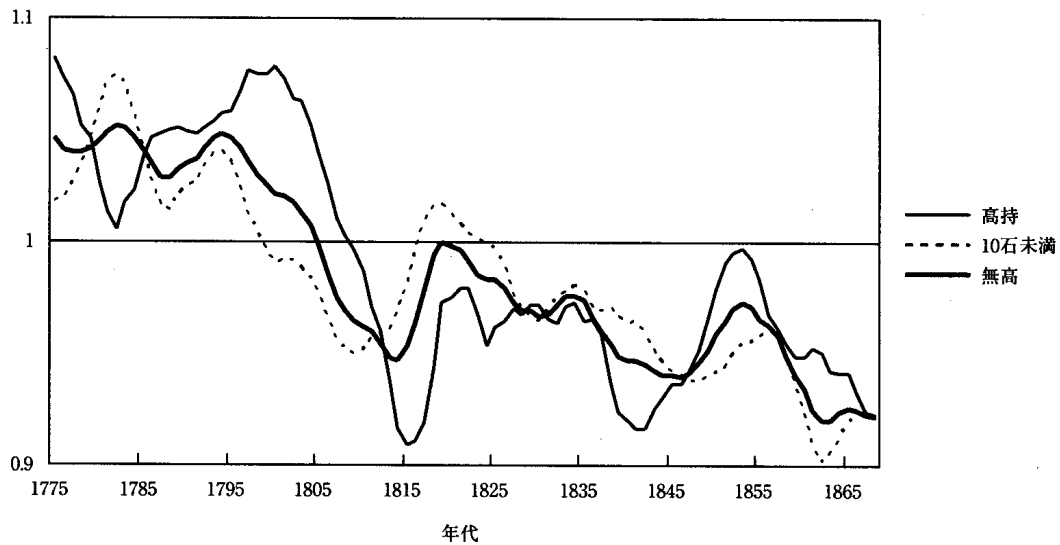


図2—16 式之新町性比 (5年移動平均)

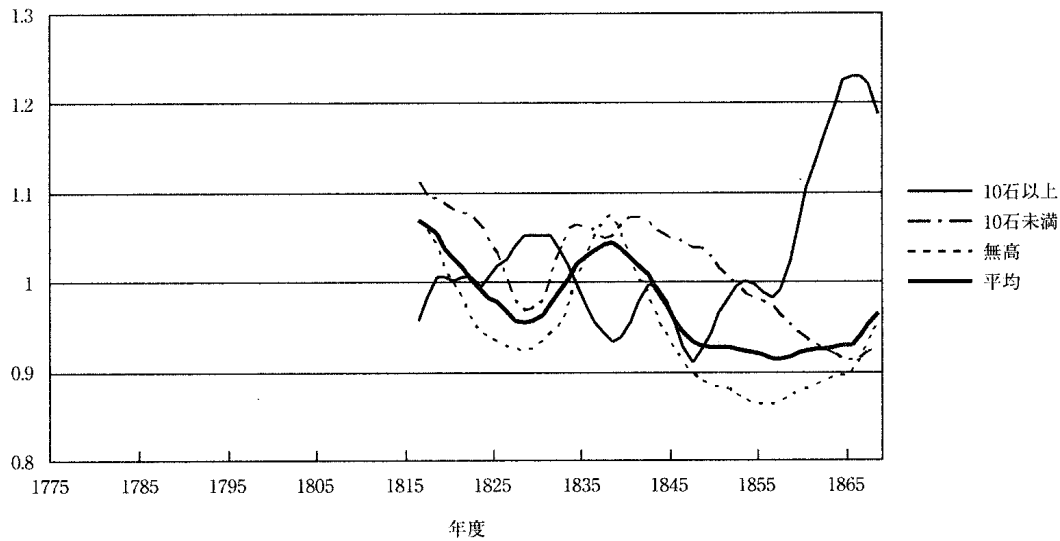


などはその好例である¹³⁾。それでは高山の場合はどうであろうか。図2—15は式之古町の性比の推移を5年移動平均で示している。10石以上層で1777年あたりから性比が急上昇しているが、それ以外のほとんどの年度では1.10以内におさまっている。総じて性比は1.00以上であることが多いが、10石未満層では1.00を下回っている年度がめだつ。無高層は振幅が最も小さくかつ性比が小さい。1.00以上と1.00以下の年がほぼ同数である。加重平均をみると初年度は1.05であり、1785年までは上昇している。明らかに10石以上層の高い性比に引きずられている。しかしその後は上下運動を繰り返しながら趨勢としては下降しており、とくに1858年からが1.00を下回っている。出生性比は1.07であるから、性比低下の原因は移入人口のうち、女性人口が増加することによる。また末年になると3者の性比がほぼ等しくなる。

図2—16は式之新町の性比である。古町に比べて各階層間の差が小さい。高持層は初期のころ急激に下落するがその後は1795年の1.06から急上昇する。しかしそれから急速に下落し始め、1809年には1.00を割り

13) 高橋前掲書

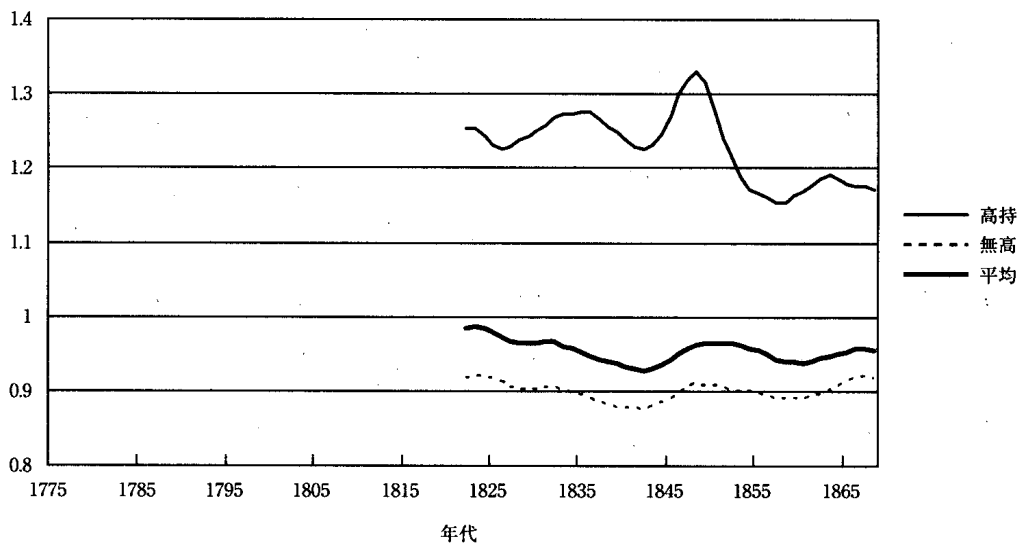
図2—17 壺之古町性比（5年移動平均）



1815年には0.80と最低の水準に落ち込む。その後は上下しながら1.00を回復することはない。無高層は年初に上昇して1785年に1.07に達するが、その後は急下落して高持層より早く1800年に1.00を割り込むが、すぐに反転して1817年には1.00の水準を回復する。しかし1820年の1.02を頂点として下落し始め1826年に再び1.00を割り、それ以降は激しい上下を繰り返しながら1.00以下の水準で推移する。両者を併せた加重平均で見ると1805年までは1.00以上の水準を保っているが、それ以降は高持層と無高層が相殺しあうので振幅はそれほど大きくないが、上下しながら1.00以下の水準にとどまる。新町は古町より早く1.00を割るが、全体としてみればどの階層も性比が下落傾向にあり、年末には3者とも同じ値をみせるのは古町と同様である。また性比の低い無高層が後半になると両町とも増加するのも、加重平均でみた両町の性比を大きく下落させる理由である。

図2—17に壺之古町の性比を示す。この町の性比は他の町に比してはるかに複雑に変動している。まず10石以上層は0.95で始まり翌1822年に1.00の水準に達し1828年までは1.00をはさんで上下し、1829年から1834年まで1.00を上回っている。そして1835年から1841年まで1.00を下回り、

図2—18 壺之新町性比 (5年移動平均)



さらに1842年から1851年まで1.00を上回る。1852年に再び1.00の水準を下回る。さらに1853年から3年間は1.00を越えるが、次の3年間は1.00以下に下落し、1859年から1.00を回復し1860年から急速に性比は上昇し1868年に1.23の高率となる。10石未満層は1.10から始まり急速な下降を示し、1826年に1.00を割り込み1831年には0.95まで下落する。それから突如1.00の水準にまで復帰し1851年まで1.00を維持する。その後1.00以下の水準で推移する。

無高層は1.00以上で始まるが1821年から1835年までは1.00以下であり、1823年から1834年まではほとんど1.00以下で経過し、1835年から1842年まで1.00以上に上昇し。1843年から1.00以下で推移し最後の1868年に0.93で終了している。壺之古町は趨勢として性比は下降傾向にあるが、式之町と異なり時代が進むにつれ各階層の性比は拡散している。

図2—18で示す壺之新町の性比の推移はこれまでの3町に比べてはるかにシンプルである。すなわち高持層は最初から最後まで1.00以上の水準を維持し、1849年に1.33の水準にまで達する。その後は急速に下落するがそれでも1.10以上に止まっている。これに対し無高層は全期間を通じて0.90もしくは0.80の水準で推移している。絶対数において圧倒的に

多い無高層に依じて加重平均も全期間を0.90の水準で推移している。

全体をまとめると高持層は無高層に比べて性比が高い。しかしその高持層も壺之新町を例外として1を割ることがある。とくに弐之新町ではかなり早い時期から1.00を割り込んでいる。これに比して無高層はやはり壺之新町を例外として、前半は1.00以上であるが、時代の経過とともに次第に1.00以下に下落する。すなわち無高層は高持層に比べて相対的に女子が多いのである。恐らくこのことが高持層と無高層の出生率にあまり差のないことの一原因であろう。この問題は次稿で検討することにしたい。

4. 世帯数の推移

つぎに世帯数の動向について分析する。ここでも積み上げ方式を採用する。図2—19は弐之古町の世帯数の推移である。総数は247で始まり1776年までに281と急速に上昇し、天明の飢饉の時期に1785年に227とこれまた急速に減少している。その後は起伏はあるものの、趨勢として増加傾向にあり1830年に327に達する。それから人口と同様天保の飢饉が始まる以前から減少し始め、1839年に279にまで減退する。飢饉の影響

図2—19 弐之古町世帯数の推移

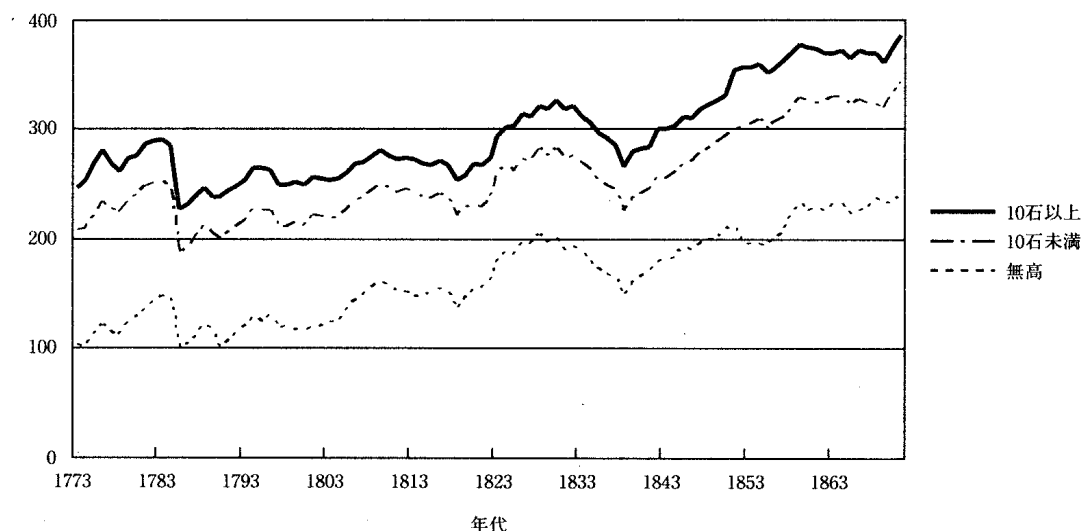
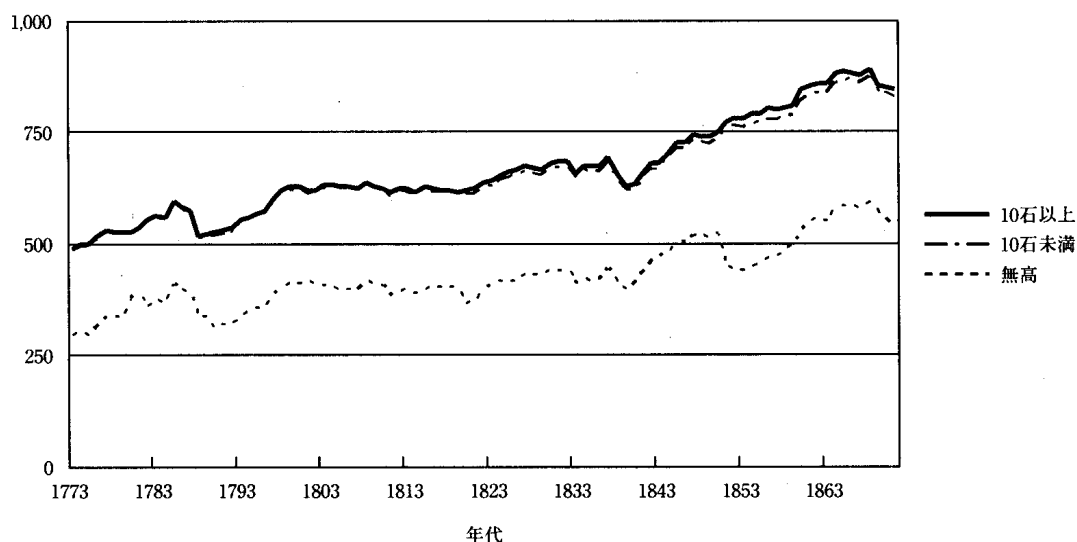


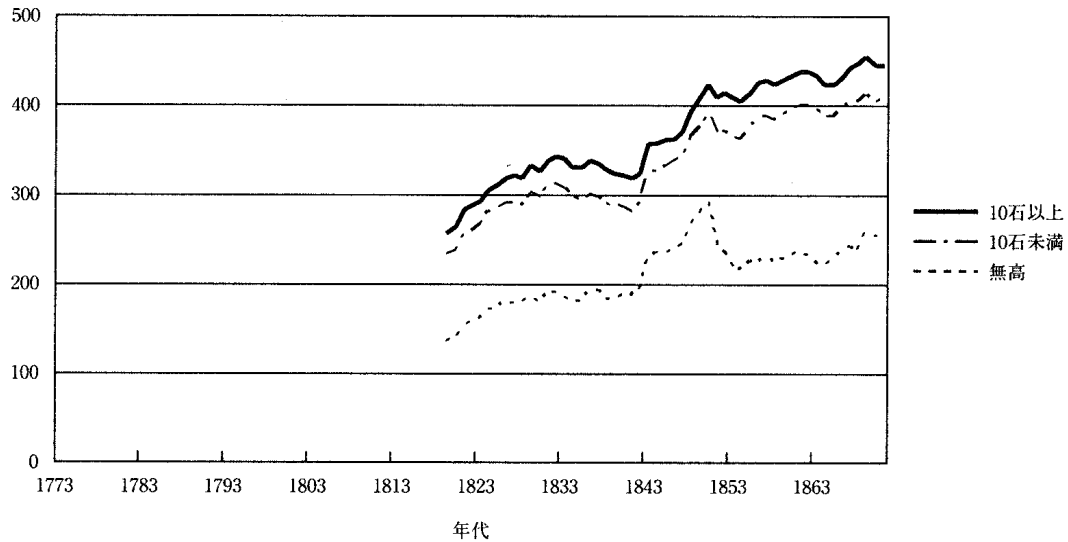
図2—20 式之新町世帯数の推移



が去ると再び世帯数は増加を再開し、これもまた人口の場合とは異なり最終年度の1871年に386と最大の世帯数を記録する。10石以上層は40で始まるが1787年から1824年の長期にかけて30台に落ち込み、1825年に41と再び40台を回復し1851年には55にまで上昇するが、それ以降大部分の時期を40台で推移する。10石未満層は104で始まるが、人口と同様長期減退で、1841年には75を記録する。その後は回復基調になり1871年の103で終了する。無高層は103で始まるが1785年には99にまで落ち込む。それからは回復傾向に入り起伏を繰り返しながら1828年に204にまで増加する。天保の飢饉時には最も大きな被害を受け148にまで減退する。その後は回復増加に向かい総世帯数と同様1871年に240と最大値を記録し終了する。全体として10石以上層は停滞に近いといってよく、10石未満層も後半で増加に転ずるがそれでも当初の世帯数を回復にするにとどまり、結局、世帯数の増加は無高層によってなされたのである。

図2—20は式之新町の世帯数の推移である。10石以上の世帯が年平均11.6のみなので、10石未満層と併せて高持層として扱う。まず総数からみると487で始まり直後の1783年に564に増加するが、天明の飢饉時に518と一時的な減少があったが、人口と同様その後は増加基調に入り、

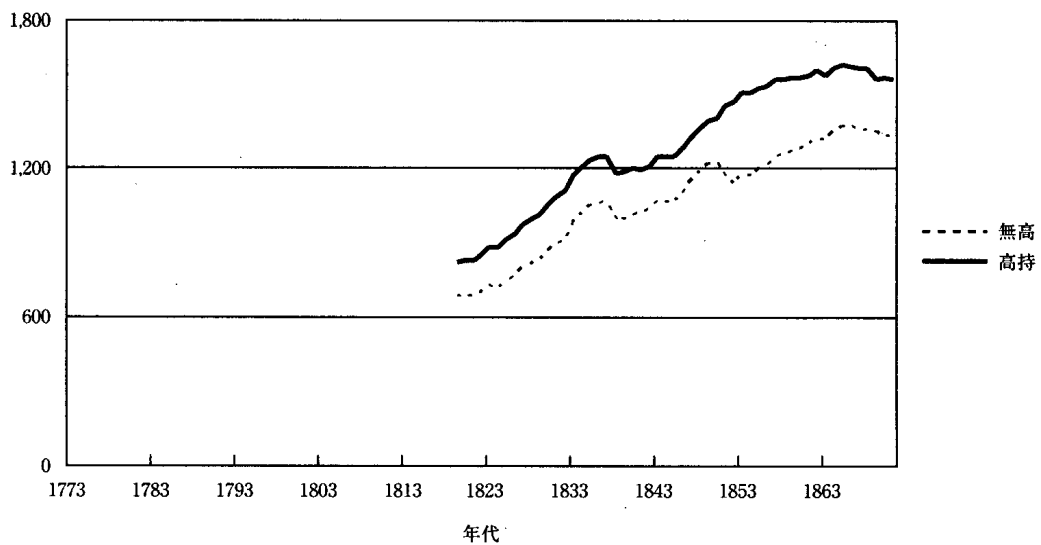
図 2—21 壺之古町世帯数の推移



1798年には619と600台に達する。天保の飢饉まで増加を続け極大値は1837年の691である。飢饉当時は1839年の630にまで下落するが、すぐに回復増加に転じ1868年に891の最大を記録し、1871年の846で終了している。高持層は192で始まり1790年に219と200台にのせ、1843年には213と一時的な減少があるがその後は回復増加を続け、1854年に344の最大値を記録し、1871年の309で終わっている。無高層は295で始まり中途天明の飢饉時に306と一時的な減退を経験するが、その後は順調に成長を続け1798年に401と400台になり天保の飢饉時にも394と僅かな下落で乗り切り、1845年には500ちょうどになり、さらに増加を続け1868年に589の最大値を記録し、537で終了している。古町と同様、高持層も増加趨勢にあり、飢饉時には減少するが、全期間を通じて世帯数の下落幅が小さいことが人口の趨勢とは異なる。とくに飢饉時には人口ほど減少しない。

図 2—21は壺之古町の世帯数の推移である。総世帯は257で始まり1841年の318世帯で増加のテンポが一時中断するがそれを除けば全体として増加趨勢にあるといえる。1849年には406に増大し1869年の454を最大値として最終年に446で終了している。10石以上層はグラフをみればわかるように、式之古町と比べて10石未満層との間隔が小さい。すなわ

図2—22 壺之新町世帯数の推移



ち人口同様壺之古町の10石以上層の世帯数は弍之古町の10石以上層に比して絶対的に少ないのである。それでも23で始まる世帯数は天保の飢饉時に減少することなく順調に増大し、1852年の43を最大値として1871年に33とやや大幅な下落で終わる。10石未満層は98で始まり途中で1840年から1950年までの11年間の間90台に低迷することもあるが、それ以外の時期は100台で推移し、1863年には172の最大値を記録する。無高層の動きは最も活発で136で始まる世帯数は天保の飢饉の影響もほとんど影響を受けず、1843年には228と200台に達し、1850年に293の最大値に至る。その後はやや減少傾向に入り255で終わっている。

図2—22は壺之新町の世帯数の推移である。ここでも10石以上の階層が少ないので10石未満層と併せて高持層として扱う。総数は822で始まり天保の飢饉の影響を古町よりやや大目に受けたが、基調としては増加傾向にあり、1829年に1,008と1,000の大台にのせ、1865年には1,627の最大値に達する。無高層も基本的には増加趨勢にあり、684で始まる世帯数は1834年には1,016と1,000の大台にのせ、途中で1838年に991と増加趨勢が一時中断するが、すぐに回復増加趨勢にもどり1865年には1,372と最大値を記録する。総じて世帯数は人口と異なり壺之町でも増

加趨勢にあり，2度の飢饉の被害は人口より少ない。

人口と世帯数が判明したので，つぎに世帯当員数を検討してみよう。
図2—23は式之古町の世帯当り員数である。10石以上層は4.3人からスタートし1803年の6.1人まで上昇傾向にあるが，それ以降は漸減に向かい1820年に4.6人と5人台を割り込み，さらに1843年に3.9人になり4人台を切る。10石未満層は4.1人で始まるが一貫して漸減傾向にあり1776年には3.9人と4人台を割り込み，1831年に2.99人と3人台を下回り

図2—23 式之古町世帯当り員数

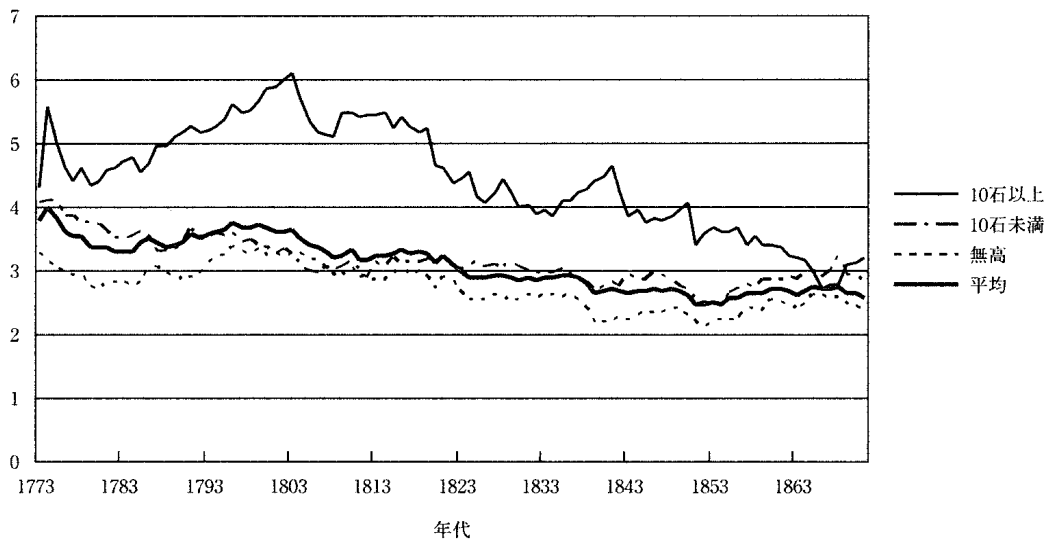
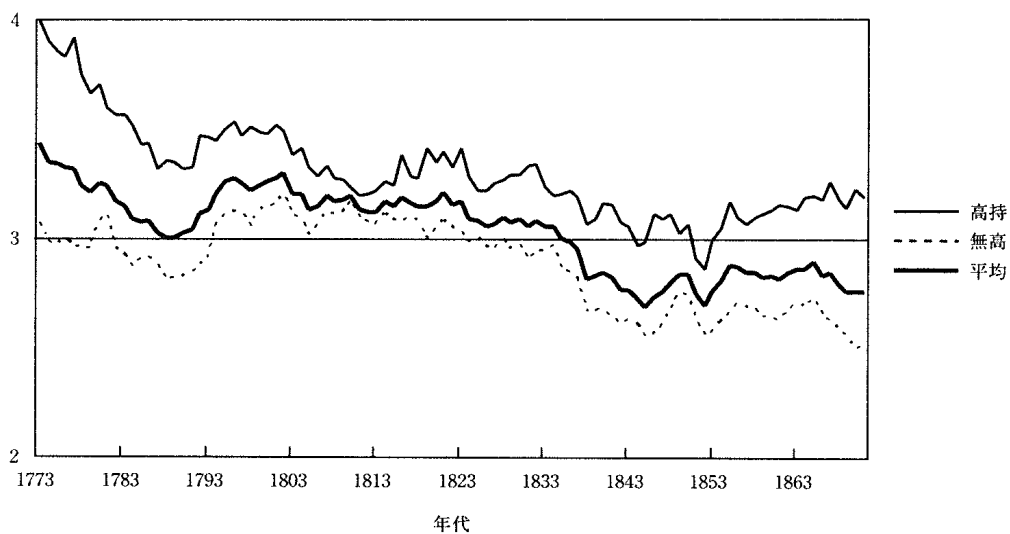


図2—24 式之新町世帯当り員数

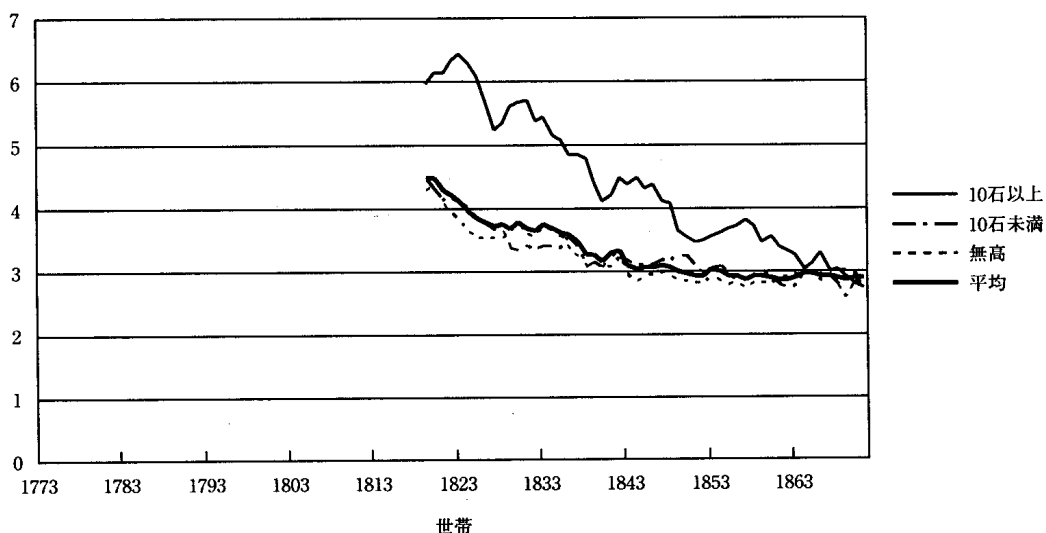


1871年まで2人台で終始する。無高層は3.1人と3人台で始まるが3人台と2人台を1816年まで行き来しているが、1817年から2人台に定着し1871年の2.4人で終了する。したがってこの3者を加重平みると、初年度の3.8人から1824年の2人台に低落し、最終的には2.6人で終了している。

図2—24は式之新町の世帯当り員数である。高持層は初年度4.00人で始まるが、その後その過程は急速な員数の減少であり1803年には3.4人と3.0人台になり、1844年と1863年には3人を下回る。しかしその後は回復し末年まで3人台で終始している。無高層は辛うじて3.1人と3人台でスタートするがその後減少を続け1783年には2.7人と3人台を切る。その後増加に転じ1794年から1830年までは3人台を維持する。しかし1831年から再び2人台に転落し、年度の終わりにさらに急速に減少し、最終年度は2.5人まで落ち込む。無高層の絶対数が多いので高持層と無高層の加重平均も3.4人で始まるが、1838年には2.8人と3人台を割り最終年度まで2.8人と2人台で推移している。

図2—25は壱之古町の世帯当り員数である。10石以上層は6人台で始まるがこれは同時期の式之古町のそれより大きな値である。しかしそれ

図2—25 壱之古町世帯員数



以降の減少は弐之古町より急速で1826年に5人台、1836年には4人台、1849年には3人台、1869年には2人台という経過を辿っている。ここでも弐之古町と壺之古町の高持層の質的な差をみてとれる。これに対し10石未満層は減少のテンポが緩やかで4人台で始まり1825年に3人台、1855年に2人台へと減退していく。無高層はほぼ10石未満層と似た経過を辿り、4人台で始まり1825年に3人台、1851年に2人台という過程を経ている。10石未満層と無高層が同様な過程を辿っているため、人口の圧倒的部分が同じ過程を経ていることになり、3者の加重平均は10石未満層と無高層とほぼ同じ軌跡を描くことになる。4.7人で始まる平均は1829年に3.8人になり、1865年に2.9人に減少している。

図2—26は壺之新町の世帯当り員数のグラフである。ここでも当初は高持層が4.3人と比較的大きな値を示すが、その後の減少は古町と同様急速で1824に早くも3人台へ落ち込み、1852年に2人台へ低下しその後1841年に再び3人台を回復するが1843年に再度2人台へ下落し、それ以降3人台に近い2人台で推移している。無高層は早くも1825年で2.9人と2人台に下落し、それ以降2人台で年度末まで移行している。壺之新町はもともと無高層が圧倒的に多いので、高持層と無高層両者の加重平

図2—26 壺之新町世帯当り員数

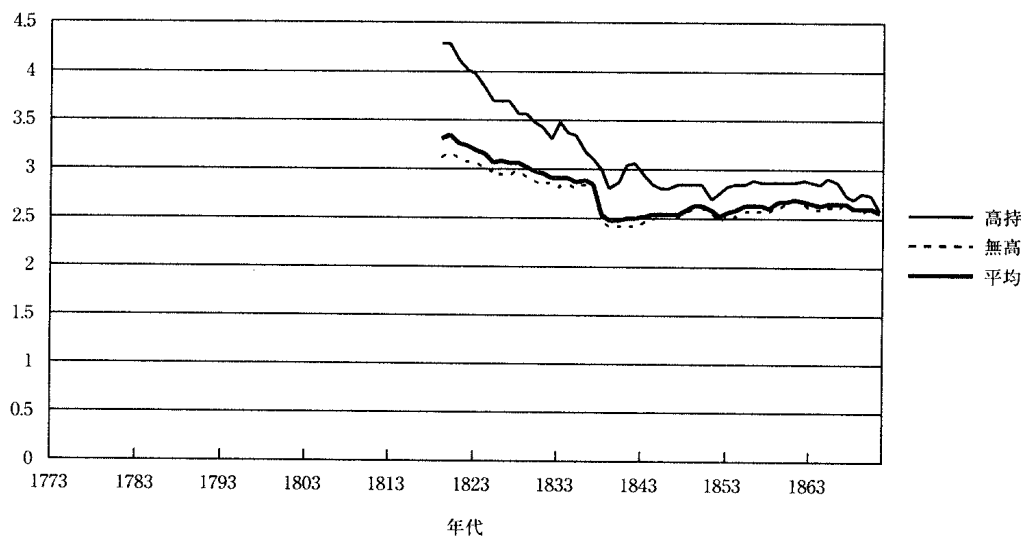


表2—9 累計世帯当り平均員数

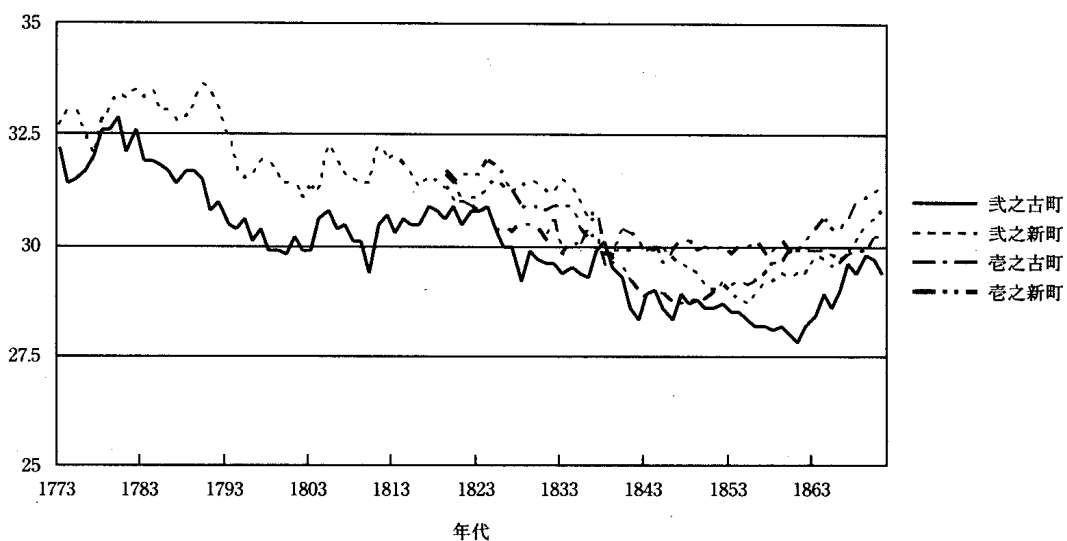
	10石以上	10石未満	高 持	無 高	平 均
式之古町	4.4	3.2	3.5	2.7	3.0
式之新町			3.5	2.9	3.0
壺之古町	4.2	3.2	3.4	3.1	3.2
壺之新町			3.1	2.7	2.7
平 均	4.0	3.2	3.3	2.8	2.9

均はほとんど無高層と同じ軌跡を辿ることになる。

99年間および53年間の累計階層別世帯平均員数を表2—9に示す。4人を上回るのは式之古町および壺之古町の10石以上層のみで、式之古町、式之新町、壺之新町の無高層を除く他の階層はいずれも3人台である。このように世帯当り員数が少ないのはかなりの夫もしくは妻を欠く欠損家族が多く存在することを意味する。また高持層と無高層の差が少ないのも、出生率の階層間の格差が小さいことを意味する。この問題は次稿で論ずることにする。

総じて世帯数は飢饉時でもあまり減少せず、そのために成長率は人口

図2—27 平均年齢の推移



に比べて高い。これが世帯当り員数を漸減させる原因になっている。

5. 平均年齢の推移と年齢別人口構造

紙数も尽きかけているので最後に平均年齢の推移と年齢別人口構成を簡単に紹介して本稿を終わりにしたい。図2—27は4町の各階層の平均年齢の平均をプロットしてある。

4町のなかで最も若いのは弐之古町である。1778年から1789年までの3年間32.6歳と32.5歳を越えたのみで、以降は1798年に29.9歳と30.0歳を切り、その後やや年齢が増加して1827年まで30歳台に止まるが、1828年より30歳を割り年齢は低下趨勢にあり、1860年に28歳まで低下する。その後は急激な上昇局面を迎え、1871年に29.4歳で終了している。弐之古町の年齢が他の3町に比して若いのは、譜代を雇っていることと、裕福であるが故に乳児死亡率が低く、生存している子供が多いためである。弐之新町は弐之古町より年齢が高く32.7歳で始まるが1794年に31.7歳と32歳をきる。その後も年齢は低下し続け1845年に29.6歳と30歳の壁を破る。ちなみに同年の弐之古町の年齢は28.6歳と1歳若い。更に下落は続き1855年に28.7歳と最も若い年齢に達する。その後は上昇に転じ最終年度は30.8歳である。壺之古町は1819年に31.7歳と同年の4町のなかで最

表2—10 町別石高別平均年齢

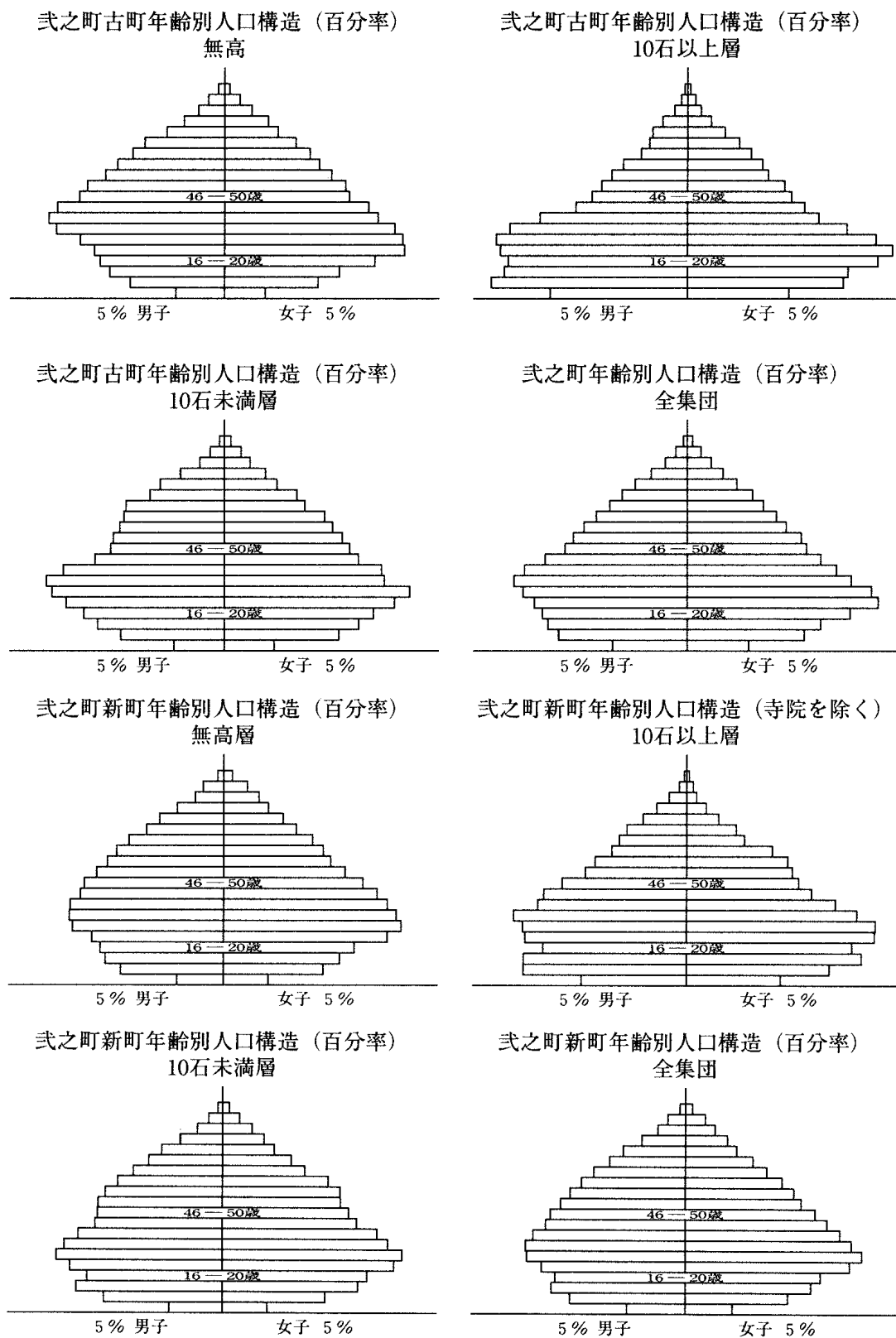
	10石以上			10石未満			無高			平均		
	男子	女子	平均	男子	女子	平均	男子	女子	平均	男子	女子	平均
弐之古町	27.0	28.9	27.9	31.3	31.2	31.2	30.3	29.9	30.1	30.0	30.1	30.1
弐之新町	29.3	30.7	30.0	31.9	31.5	31.7	30.9	30.4	30.7	31.3	30.8	31.0
壺之古町	27.0	30.9	29.0	30.5	30.9	30.7	30.3	30.0	30.2	29.9	30.4	30.2
壺之新町	30.1	33.1	30.8	30.7	30.7	30.7	29.9	30.1	30.0	30.0	30.2	30.1
平均	27.6	29.8	28.6	31.3	31.2	31.3	30.3	30.2	30.2	30.5	30.4	30.5

高年齢で始まるが傾向としては低下趨勢であり、30歳前後行き来している。最終年度は30.2歳である。壺之新町は31.6歳で始まり壺之古町より年齢低下は著しく1838年に29.5歳と30歳の線を超えた。低下傾向は1848年の28.7歳まで続くが、それ以降は上昇に転じ1871年の31.3歳と4町のなかで最も高年齢で終了している。式之古町を除く他の3町の年齢が高いのは式之古町がその若さの要因としてもっている要素を欠いたためであろう。

99年分および53年分の階層別平均年齢を表2—10に示す。

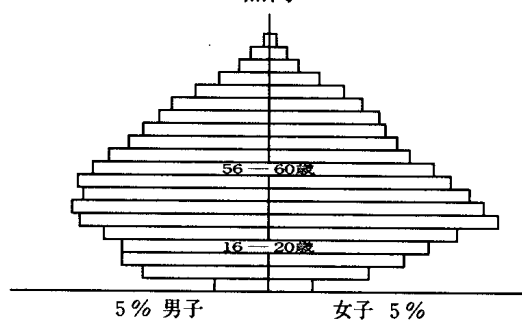
この表を5歳刻みでグラフにしたのを図2—28として示す。20歳台であるのは式之古町の10石以上層の男女、式之新町の10石以上層の男子、壺之古町の男子、壺之新町の無高層の男子のみである。

図 2—28 年齢別人口構造



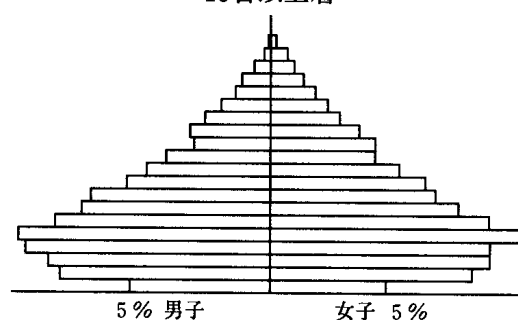
壺之町古町年齢別人口構造 (百分率)

無高



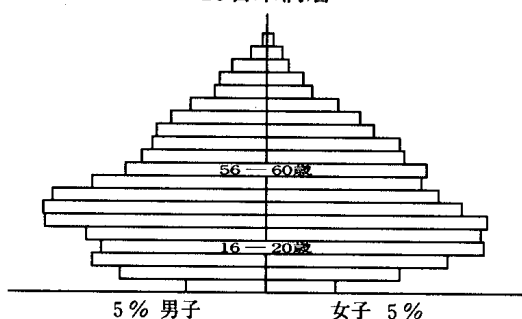
壺之町古町年齢別人口構造 (百分率)

10石以上層



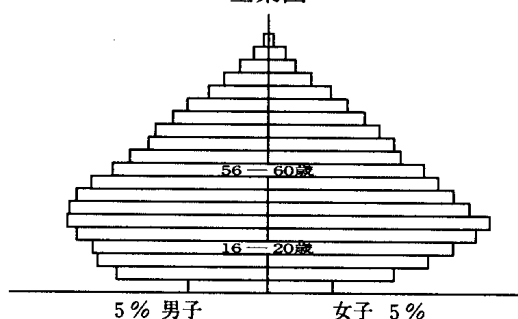
壺之町古町年齢別人口構造 (百分率)

10石未満層



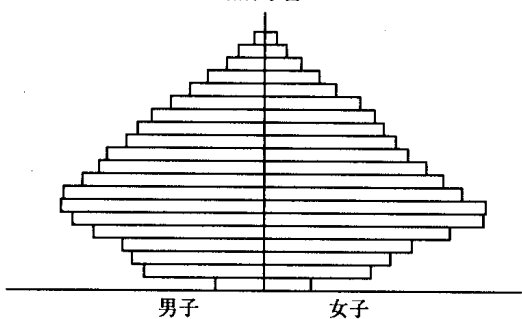
壺之町年齢別人口構造 (百分率)

全集団



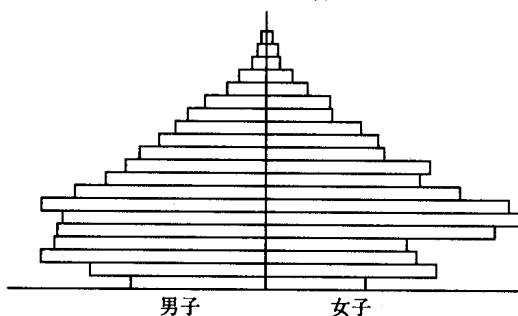
壺之町新町年齢別人口構成 (寺院を除く)

無高層



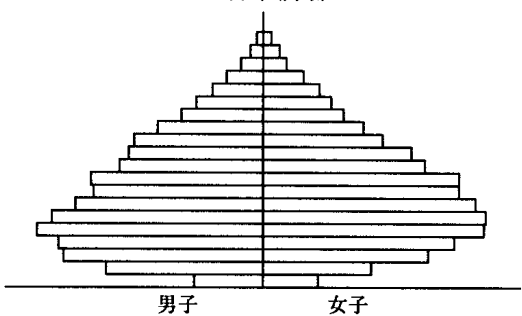
壺之町新町年齢別人口構成 (寺院を除く)

10石以上層



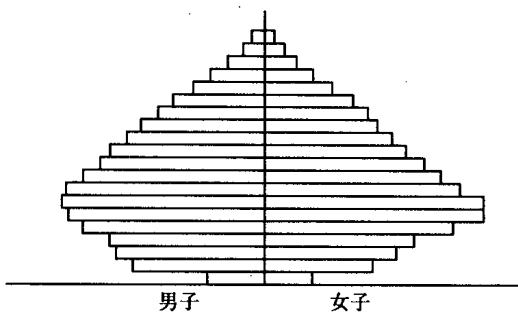
壺之町新町年齢別人口構成 (寺院を除く)

10石未満層



壺之町新町年齢別人口構成 (寺院を除く)

全集団



(2003年7月2日 受理)